

プロシュート兄貴「オレ達チームは仲良しクラブじゃないと言った
な。あれは嘘だ」

飛沫

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ペツシが暗殺チームに加入して、死亡するまでの期間をもうそ……想像した、仲良し(?)暗殺チームの日常話。

ほのぼのだったりシリアスだったりグロかったり。

注意点

書いてるのがペツシ大好き人間なので、ペツシを軸に話が進みます。

独自設定・独自解釈盛り沢山。

あからさまなBL描写はないですが、出てくるのが野郎ばかりに加え、書いてる人間が腐っているのでそれっぽく見えるシーンがあるかもしれません。

pixivにも同タイトルで投稿させてもらっています。

目次

ペッシ君とプロシユート兄貴	一
ペッシ君とプロシユート兄貴	二
ペッシ君とプロシユート兄貴	三
ペッシ君とリゾットリーダー	—
ペッシ君とソルベ先輩にジエラート先輩	—
ペッシ君とホルマジオ先輩	—
ペッシ君とイルーゾオ先輩	—
ペッシ君とメローネ君	—
ペッシ君とギアツチヨ君	—
四月一日深夜、自室にて	—
18時10分過ぎ、フィレンツェ超特急にて	—
時刻不明、クル・ヌ・ギ・アにて	—
ペッシ「旅行から帰ってきたら、ボスが変わってたんすけど」	—

ペッシ君とプロシユート兄貴 一

パレルモの旧市街にあるカフェのテラス席に、男が一人座っていた。

ヘリンボーンのスーツに身を包み、ブロンドの髪をキツチリと纏め上げた男は、十人中十人が「綺麗な顔をしている」と答えるほど整った顔をしていたが、今は眉間に深いシワを寄せ、通りを歩く人を睨むように見つめている。

お陰で眺めが良いと評判のテラス席は、男が撒き散らす不機嫌なオーラのせいで誰もいない。

(あのガキ。次見かけたらただじゃおかねえぞ)

思い返すのは、一時間程前の事。暗殺を依頼されたターゲットを老化させ弱らせたところで、忍ばせていた銃を使い仕留めた後の帰りだった。突然、脇から薄汚れた子供がぶつかると、そのままポケットから姿を覗かせていた財布を掴み、走り去っていったのだ。

これが普段ならば逃げ去る前に腕を掴み、殴りつけるなり蹴り上げるなりして、盗んだ財布を奪い返していただろう。しかし今回は万が一の目撃を防ぐために己の肉体を老化させていたので、素早い対応ができなかった。不幸中の幸いというか、スラれた財布には大した金が入っていないかったが、男がにとつては盗んだ子供を逃したという事実の方に怒りの比重があるので、あまり慰めにはなっていない。

イライラした気分のまま、運ばれてきたエスプレッソに口をつけようとした時だった。通りから怒声が聞こえたかと思ったら、一人の子供がこちらに向かって走ってくる。擦り切れた服に、痩せた体躯の子供だ。その姿を目にした途端、男は更に目付きを険しくさせる。

(あのガキ!!)

見間違えるはずもない。走ってきたのは先程のスリの子供だ。盗られた財布を取り返すべく、男は荒々しく代金を机の上に叩きつけるようにして置くと、柵を飛び越えて子供へと近づいていく。一方子供の方は、背後から響く怒声を気にしながらしきりに頭上に視線を送っていた。やってくる男に気付いた様子はない。しかし何かを見つけ

たのか、表情を明るくするとそちらの方へ向かって走り出した。体重が軽いせい、スピードは早い。男は舌打ちをして、追いかける。

見失わぬよう必死になって追えば、子供は奥へ奥へと駆けて行き、足を止める。

(ハン、何を目印に走っていたかは知らねーが、行き止まりじゃねーか)

袋の鼠となった子供に、男は口元を緩く釣り上げて速度を緩める。こうなってしまうえば、逃げ場はない。子供は身に覚えがないと言い張るだろうが、適当な理由で痛めつけられれば財布を出さだろう、そう思っていたら。

「オイー… っこーだー」

子供は突然、右手を上げて声を張り上げる。すると、壁となって道を塞いでいる建物の屋上から、もう一人子供が姿を見せた。緑色の髪に顎と首の境目がない、まるで木の幹のようなかなり特徴的な体躯の子供は、声の主を見つけると手にしていた緑色の釣り竿を振り下ろす。

途端、子供の身体が重量に逆らうかのように浮かびあがった。子供は不快そうな表情を浮かべるがそれも一瞬で、壁に足をつけると再び勢い良く走り出す。まるでアクション映画のように垂直に壁を登り切ると、子供たちの姿は見えなくなる。

その様を、男は信じられない気持ちで見ている。

「何だ、今のは」

無意識のうちに言葉がこぼれる。釣り針で服を引っ掛けて持ち上げたのか。

(いや、違う。糸はガキの体内に潜り込んでいた)

男は直ぐに否定する。遠目からでもはつきりと見えていた。あの釣り糸はまるで無い物かのように服をすり抜けて子供の体内に埋まり込み、釣り上げていたことに。つまり屋上の子供が手にしていた釣り竿は、普通の釣り竿ではないのだ。

「……ツク」

先程までの怒りが嘘の様に、気分はすっかり高揚していた。薄汚い

子供を追った先で、こんなに面白いモノを見つけてることになるとは。ふと上を見れば、恐る恐るといった表情で下の様子を伺っている子供と目があう。気づかれると思ってもいなかったのか、子供はビクリと身体を震わせ右手に持っていた釣り竿を手放す。瞬間、まるで空気に溶け込むかのようにかき消えるソレを見て、男は確信する。

(あのガキ。生まれつきのスタンド使いか)

笑みを浮かべる自分に、何かを感じ取ったのだろう。子供は怯えた表情を浮かべたまま、しゃがみ込むようにして身を隠した。姿が見えなくなっても暫くその箇所を眺めていたが、不意に背後が騒がしくなったので振り返る。

いたのは、数人の男。金回りは良さそうだが、顔つきと身にまとう雰囲気は明らかに堅気のものでは無い。おそらくは同業者だろう。

「クソ、あのガキ何処に隠れやがった。おい、お前ら！ 浮浪者共に金握らせて、ガキを探させろ。まだこの辺りに隠れてんだろ、捕まえて俺の前に連れてこい！」

中央の男が叫ぶと、両端にいた男は返事をして走り出す。その光景を眺めてから、男は建物に背を向けて歩き出した。連中に子供たちの居場所を教えてもいいのだが。

(オレにんな義理はねえいな。それに、アレらが動いてくれた方が手間が省ける)

そうして大通りへと出ると、公衆電話を見つけた。数回のコールの後に聞こえたきたのは低い男の声。

「リゾットか。ちょうどいい」

『……プロシユートか。終わったのか?』

「ああ、今しがた」

『そうか、ご苦労だったな。報告は』

「そのことなんだがな、仕事は終わった。文句のつけようがないくらい完璧にな。だか、戻るのは少し遅くなる」

『どういう事だ?』

「何、面白いモノを見つけてな」

『……面白いモノ?』

「ああ。だからそつちに戻るのはもう少し先になる」
「楽しみにしておけ、リゾット。ひよつとしたらいい土産を持って帰れるかもしれないぞ」

ペッシ君とプロシユート兄貴 二

バクバクと早鐘を打つ心臓を抑えつけるように、胸元に手を押し当てながらオレはこっそりと下を眺めた。

(もう、いなくなつた……?)

見る限り、道路には誰もいない。さつきまでは誰かの怒鳴り声が聞こえていたけれど、今はそれも聞こえない。端まで見渡し、誰もオレたちがいる屋上を注視していないことをようやく確認できて、安堵の息をつく。

(何だつたんだろう。さつきの兄ちゃん)

そう多くはないけれど、今までにも何度か逃げる姿を目撃されたことはある。そして、目にした人間は「信じられない」か「薄気味悪い」という表情しか浮かべなかつたのに。

(あんな……笑うなんて)

さつき、相棒を釣り上げる姿を見た高そうなスーツを着た兄ちゃんは違った。怪訝そうな顔をしたのはほんの僅かな時間だけ。後はオレを見つけると、まるで良いものを見つけたというような。それはもう、楽しそうに笑つたのだ。なまじ整つた顔をしていた人だつたら、向けられた笑みには妙な凄味というか迫力があつて。オレは思わず、右手に持っていた釣り竿を離してしまつたのだ。

(そういえばあの兄ちゃん、オレの釣り竿が見えていた? ……アレ?)

ああ、そうか。少し勘違いをしていた。兄ちゃんから探るような目付きを向けられ、オレは怖気づいて釣り竿を離した。そして釣り竿を認識してから、兄ちゃんは笑つたんだ。

(まさかこの釣り竿が見える人がいたなんて)

汗ばんで湿つた掌をじつと見る。あの釣り竿は魔法の釣り竿だ。六歳の頃、起きたら指先から十cmくらいの釣り糸が生えていて飛び起きたオレは、両親に必死で訴えた。だけど、顔の前にまで糸を見せても何も言わず「夢でも見たんだろう」と笑う父ちゃんを見て「この糸はオレにしか見えないんだ」と気付いた。最初は勝手に生えてきた

糸だったが、オレが成長するにつれて糸はだんだんと長くなっていき、遂に十歳の時に今の釣り竿の姿になった上、オレの意思で自在に出せるようになった。

けれど、今みたいに使うようになったのは十五になってから。両親が死んでしまつて誰が引き取るという話になつた時、皆オレのみたくれの悪さを気にして尻込みし、この年齢なら一人でも生活出来るだろうと世間に放り出された。その時に、魔法の釣り竿で何か出来ないかと色々試してみた結果『生き物なら何でも釣り上げることが出来る』『糸は壁なんかの障害物を無視して通過することが出来る』という事がはじめて解つたのだ。

それからは日雇いの仕事があればそれに従事して、無ければ海で釣りをする日々が続いた。釣つた魚を店に持つて行けば、なんとか生活出来る金額にはなつてくれたからだ。二ヶ月くらいその生活を続けていた時。

『なあ、お前。それ、どうやって釣つてるんだ』

同じ年くらいの男が不思議そうな顔をして、訊ねてきた。そりやそうだろう。周りから見れば、オレは道具も何も持たずに魚を釣り上げているのだから。

適当に誤魔化していても男は納得せずにしつこく食い下がつてきたので、遂にオレは魔法の釣り竿の事を話す羽目になる。目の前で釣り竿を見せても、やっぱり男には見えていないみたいだったが、釣り竿の能力はかなり魅力的に聞こえていたらしい。

『凄えじゃねーか！　なあお前、それならオレと組んで一稼ぎしようぜ！』

臆病なオレは最初は乗り気になれずにいたが、男は必死で説得してきて。その内に段々嬉しくなつてきたのだ。何しろ人に必要とされたのは久しぶりだったから。

こうしてその日から、オレは男の相棒となつてスリ稼業にすることになったのだ。

* * *

「オイッ！　オイッてば！」

「ッ!？」

肩を揺さぶられ耳元で叫ばれて、ようやくオレは我に返る。顔を上げれば変な顔をしてこつちを見ている相棒がいた。

「どうしたんだよ、さつきからボンヤリして。大丈夫かよ、オイ」

「う、うん。さつきオレたちを見ている人がいたから。びつくりしただけだよ」

「人が見てたア?」

オレの言葉につられるように、相棒も下を覗き込む。

「いねーじゃん」

「う、うん。さつきどっか行つたみたいだ」

「だったら大丈夫だろ。オレたちに気づいてたらずっとこつちを見ているだろうし。お前は気にしすぎなんだよ」

「そ、そうだね。そうだよな!」

相棒の言葉に自分の声を被せて納得させる。ああ、そうだ。オレはビビりでカンがよくないから、変に勘違いして不安がつていただけだ。だって釣り竿は今まで誰にも見られたことはない。家族にだけ。これから先、見ることのできる人なんて現れるハズがないんだ。「それより見ろよ、この紙幣の量! まだ三人だけけど今日はもうこれで充分だな!」

一方相棒は興奮した様子で盗った財布をひっくり返して、オレたちの前にちよつとした紙幣の山を作る。

思わずつばを飲み込んだが、同時に不安も生まれた。最近の相棒は少しずつだが、無謀になってきている。大人しそうな観光客相手のスリが、最近は金持ちそうだけれど、どこかヤバそうな相手に変わってきた。さつきの怒声も動転してよく聞いていなかったけれど、もしかしたらオレたちを探している声かもしれないし。

「じゃあほら、今回のお前の取り分」

「え、コ、コレだけかよオ?」

紙幣を纏めていた相棒が金を差し出してきたが、その量を見て思わず不満が口に出た。どう見ても相棒の取り分が多すぎる。スリを行うのは相棒だから、取り分は向こうが多いというのは最初に決めた約

東事だし、理解していたが今回は少なすぎだ。これじゃあオレの取り分は相棒の三分の一もないことになる。

「だけどオレの文句にも、相棒は涼しい顔で反論してきた。」

「何だよ、身体張ってるのは俺の方なんだぜ。お前に俺みたいなことできんのかよ」

「ウツ、そりゃあそうだけどきア」

「情けないが反論できない。確かにその通りなんだから。」

俯いたまま出された金を受け取る。変に反論したせいかな重たい空気が辺りを漂うが、その空気を破ったのは相棒だった。

「え……?」

「……悪かったよ。調子に乗り過ぎた。確かに今日はお前に助けてもらわないと不味かったんだ。マフィアっぽい相手の財布に手エ出しちまったからさ。追いかけられる時、殺されるかもって思ってたから、お前の姿を見たとき本当に安心できたんだ」

「そっぽをむいたまま、紙幣を渡された。」

「あ、ありがとう」

「気、気にすんな。さつきはああ言ったけれどさ、お前には感謝してるんだ。俺一人じゃ絶対、こんなにも上手く金を稼ぐことなんか出来ないんだからよ」

「うう、重苦しいのはなくなったけれど、また微妙な空気になった。な、何か言わないと。」

「な、なあー!」

「意を決して、オレはここ数日前から考えていた事を相棒に伝える。」

「シチリアから、出よう!」

「は!? お前いきなり何言ってる」

「だつて、マフィアに目を付けられちまったんだろう! なら、ここでスリを続けるのは難しいよ。それに、今日結構な額の金が入ったことだしさ、見つかる前に逃げたほうがいいと思うんだ!」

「相棒は顎に手を添えて考え込んでから「そう……だな」と頷いてくれた。」

「じゃあさ、じゃあさ、何処に行く?!」

「落ち着けよ。とりあえずは……ネアポリスだな。その先は着いてから考えようぜ」

「わ、分かった」

「じゃあ、明日船着き場に集合な。あ、服も買い替えておけよ。あんまり汚ねー格好していると怪しまれるから」

「うん、じゃあ明日!」

約束をして、一旦別れる。この時、オレは想像もしていなかった。次の日に、世界観がガラリと変わる出会いが待ち受けているということに。

ペッシ君とプロシユート兄貴 三

「相棒、どこに行っちゃったんだよー」

落ち着かない気持ちのまま、オレは辺りを見回した。フェリー乗り場に着いたのは十八時。それから三十分が経つたのに、相棒は一行に姿を見せない。

船が出るのは二十時十五分だから、時間的にまだ余裕があるといえはあれるけれど、チエツクインなんかを考えればそろそろ来ないとまづいはずだ。焦った気持ちのまま、置かれている時計と出入り口を何度も見比べていた時、強い視線を感じた。見返せば高そうなスーツだけれど、どこか普通とは違う雰囲気の三人組の男が、オレの事を指さしながら口を動かしている。

(マズイ)

頭の中で警鐘が鳴り響く。顔に見覚えはないけれど最近の相棒の行動から考えれば、あの男たちはスられた連中なのだろう。あんなヤバそうな空気を纏う相手に捕まったら、どんな目に合わされるか。想像するだけでも恐ろしい。

震え上がっていると向こうもオレが見ていることに気がついたようで、こつちに向かつて歩いてくる。とにかく逃げなくては。弾けるようにして、別の出入り口向けて駆け出した。

* * *

どれくらい走っただろう。人通りの多い道を目指していたものの、足音や話し声が聞こえる

度にビビりのオレは足を止めて回り道をするハメになった。そうして自分でも方向感覚があやふやになりかけていた時。辿り着いた先は行き止まりの小路だった。

「……ッ！」

ザアツと血の気が引く。この小路は見覚えがある。あまり人が通らない為に、よく相棒が逃げる先に使っていた小路だ。ましてや今は夜、多少大きな音がしてもきつと誰も気が付かない。

「ガキの浅知恵で逃げられると思っていたのか。ここは俺たちの縄張

りだ。どう誘導すれば、何処に逃げ込むかなんてお前たちよりもよく知ってるんだよ」

複数の足音と同時に男の声が聞こえた。聞き覚えのある声。記憶を思い返して、昨日聞いた怒鳴り声に似ていることに気がつく。コイツら、昨日相棒が財布を盗んだ相手だ。

「わ、悪かったよ。金なら返すから……助けてくれよオ」

半泣きになりながら、ポケットに詰めていた紙幣の束を取り出す。服は以前から持っていた金で足りたし、船のチケットもまだ買っていないから手はつけていない。円満に解決するとはサラサラ思っていなかったけれど、金を返せば数発殴られる程度で、許してもらえると考えていたのに。

「ああ？　金を返せば許せしてもらえる？　ガキが、これだけ俺たちに手間かけさせてそんな甘い話が通ると思ってたのか」

「で、でも！　金には全然手はつけて」

「俺たちマフィアはな、舐められたら終わりなんだよ。特にお前たちみたいなガキには。頭の悪いガキが手を出したらどうなるか、見せしめが必要なんだ。こういう風にな」

「……ヒッ!!」

真ん中にいる男が、向かって何か投げてきた。ソレは右腕だ。マネキンだと思いたかつたけれど、切断部分から覗く白いモノはマネキンにはあり得ないものだし、手の甲にある特徴的なケロイドは相棒のモノにしか見えなかった。

歯をガチガチと鳴らして震えていると、男が下卑た笑いを浮かべながら言葉を続ける。

「あのガキもな、数発殴りつければ泣きながら許せしてくれと金を出してきた。だが、それで許せば警察や刑務所なんて必要ねえだろ？

今頃はスナッフフィルムの犠牲者か、臓器の献体として腹かつさばかれてだろうよ」

迷惑かけたんだ。最後くらいヒトサマの役に立たねえとな。

その言葉を聞いた瞬間、身体の震えが嘘みたいに止まった。代わりに、怒りが全身を支配する。なんで、なんでそんな酷い事を。確かに

オレたちはロクデナシだ。でも、だからって。

こんな惨い目にあうほど、悪い事なんてしてない！

「……ろしてやる」

「あん？」

「殺してやるって言ったんだ!!」

右手から釣り竿を出して、右の男目掛けて振り上げる。増悪の感情で、人に釣り竿を向けたのは始めてだった。針が男の脚に入り込んだと同時に、思い切り腕を振りかぶって壁に激突させる。

大きな音を立てて、男の身体が崩れ落ちた。呆然としている男たちに構わず、今度は左の男に狙いを定めて釣り竿を振り上げる。同じように壁に叩きつけてやれば、微かに呻いて動かなくなった。

(後は、コイツを——！)

釣り竿を向けようとした時だった。パァン、と乾いた音と共に足元の石畳が割れ、破片が足元をかする。

真ん中いた男が銃を取り出し、オレ目掛けて撃ってきたのだ。向こうも動揺していたお陰で当たりはしなかったけれど、向けられた人殺しの道具はそれだけでオレの怒りを削ぎ、恐怖を呼び戻すには充分過ぎた。

「……なるほど、ガキが言っていた『不思議な力』ってのはそれか。確かによく解らねえ、手品みたいな力で肝が冷えたが……コレには敵わないだろ」

今度はオレの顔に銃口を向ける。こんな距離じゃ避けられない。何より、恐怖のせいだか膝が笑ってマトモに動くことが出来ない。

怯えるオレを見て余裕を取り戻したのか、男は再び笑みを浮かべた。壁に叩きつけた男たちも、派手に咳き込みながら立ち上がろうとする姿が見える。

「腕を撃ち抜けばひよつとしたらと思うが……。万が一ってこともある。金にならないのは惜しいが、テメエはここで死んどけ」

人差し指が引き金にかかるのを見て、オレは死を覚悟した。そして、これ以上先の事を見たくなくて目を瞑る。その時、知らない誰かの声が聞こえた。

「ザ・グレイトフル・デッド」

やつてくる筈の痛みと死は一行に訪れず、コツコツという靴音が聞こえてきた。薄っすらと閉じていた目を開くと沈みかける夕日を背に、此方に向かつてゆっくりと歩いてくる人の姿があった。逆光で、顔はよく見えない。

「つたく、男二人をスタンドで倒したからもしやと思って見ていたんだが、銃を向けられた程度でビビるとは。まだまだ甘エな、テメーは」だが、やはり見どころがあるな。楽しそう言うと、その人は胸元から銃を取り出す。仲間なのかと思ったが、その人は銃口を下へと向けた。

つられるように視線を移し、悲鳴を上げた。さっきまでオレに銃を向けていた男が倒れていたからだ。しかも髪は真っ白、肌はシワクチャの、まるで百を超えたような年寄りの姿で。倒れたままの左右の男たちも同様だった。

もしやと思つて掌を見ると、アイツら程じゃないしろ、オレの掌も皺まみれになっている。もう一度悲鳴を上げて尻もちをつくと、その人はチラリとオレを見たが、直ぐに倒れている男へと視線を戻した。そして肩口に足を乗せると、後頭部に銃口を押しつける。

「た、助け」

「あん？ 助ける？ オレにんな義理はねエな。しかし人の来ない所に来てくれて助かったぜ。老化で殺すのは少し時間がかかる。こっちの方が手っ取り早い」

銃声と共に、ビシヤリと大量の血が辺りに飛び散った。その様を興味なさ気な目で一瞥すると、今度は左右に向けて一発ずつ銃弾を打ち込む。全員が死んだのを確認すると、その人はオレの前に立ち、見下ろしてくる。

近くに立たれて、ようやく顔が見えた。きつちりと結んだ金の髪に、整った顔のこの人は。

「よオ、マンモーニ。オレの顔は覚えているか？」

「昨日オレを見て笑っていた……兄ちゃん」

「上出来だ」

オレの答えが気に入ったかのように、満足げに笑う。今、三人もの人間を殺したとは思えないような表情だ。

「どうして……助けてくれた、んです？」

「そんなモン、オレが四人分の命よりもオメーに価値があると思ったからに決まっているだろ。他に何がある」

……四人？

「兄ちゃん、まさかオレの相棒も」

「もう少し根性があれば、分からなかったがな。数発殴られた程度で金だけじゃなく、オメーの事までベラベラ白状したからよ」

「嘘だ!!」

兄ちゃんの言葉に、オレは食って掛かった。

「だって、相棒は昨日言ってくれたんだ。オレがいて助かる、感謝してるって！ そんな、そんな」

「怯えて無様さらす姿は、オメー自身さつき証明してただろ。殺してやるって息巻いてたに、当たりもしなかった銃に怯えやがって。なんだあのザマは」

「……っ」

兄ちゃんの言葉に反論できずに下を向く。確かにその通りだ。オレは、あんなにも相棒の仇をとるつもりでいたのに、結局ビビッて出来なくて。兄ちゃんに助けてもらわなければ、復讐も遂げられずに死んでいた。

「うっ……うっ」

情けない自分が悔しくて惨めで。ボロボロと溢れてくる涙も拭わずに、泣いていた。兄ちゃんはそんなオレを同情も侮蔑も含まない目で見ていたがしゃがみ込むと、こう問いかけてくる。

「変わりたいと思うか」

顔を上げ、ぼやけた視界で兄ちゃんを見れば、真剣なオルトレマーレの瞳がオレを見つめていた。

「ならばオレの手を取れ。取ったら最後、もうシャバには戻れねーし、死んだ先に行くのは地獄だ。だが、必ず与えてやる。生きていて良かったと思える誇りと、輝かしい栄光を」

そう誘ってくる顔は、悍ましいほどに綺麗で怖いくらいだ。

ふと、ずうつと昔に神父様が教えてくれた話を思い出す。美しいモノには注意しなさいという内容だ。人は美しいモノに弱くて警戒を解いてしまうから、美しいモノの言葉や手を直ぐにとつてはいけない。それはひよつとしたら悪魔で、貴方を罪を犯させようとしているかもしれない、と。

兄ちゃんの言葉は、正にそれだ。元々天国に行けるとは思っていないけれど、この手を取れば確実に地獄の最下層にまで落とされる。人を殺してもなんとも思わない、人でなしにされる。それでも。

「オレも……なれる？ 兄ちゃんみたいな強い人に」

「なれるさ。いや、してみせるさ。オレが見込んだ男なんだからよ」

ついていきたい、後悔なんかしない。覚悟を決めて、オレは兄ちゃんがを出してきた手をしっかりと掴んだ。

* * *

「そういえばオメー、名前はなんて言うんだ」

「え」

兄ちゃんに腕を引っ張ってもらいながら立ち上がると、唐突に名前を訊ねられた。

「名前だ名前。いつまでもオメーだのオメーだのと呼んでもいられないだろ」

「名、名前……」

父ちゃんたちから貰った名前は確かにある。けれど、もう長いこと呼ばれなかったから、名前と呼ばれてもピンとこなさそうな気がした。

「何だオメー、名前が無いのか？」

「いや、その……」

正直に理由を話せば、兄ちゃんは少しの間黙り込んでから「じゃあペッシだ」と言ってきた。

「ペッシ？」

「ああ。オレの名前はプロシユートだからな。肉と魚。そう悪くはねーだろ」

「ペッシ、ペッシ……うん、オイラは今日からペッシだ。よろしく。ええとプロシユート……兄貴！」

ペッシ君とリゾットリーダー

(まさか、こんな事になるとはな)

短い息を吐いて、リゾットは向かいのソファに座っている少年を見据えた。

困惑と好奇心が入り混じった顔で辺りを窺っていた少年だったが、此方の視線に気がつくのと不躰に見回している事を咎められていると勘違いしたのか「す、すいやせん」と短く謝罪して顔を下に向ける。

完全に萎縮する少年の姿に、リゾットはもう一度短く息を吐く。

* * *

『楽しみにしておけ、リゾット。ひよつとしたらいい土産を持って帰れるかもしれねえぞ』

上機嫌で電話を超越してきたプロシユートの声に、リゾットは直ぐ彼が言っている「土産」が人を指していることに気がついていた。だが、それはあくまで「有能な情報屋」か「金さえ払えば都合よく処理をしてくれる警官」の事で「連中の住所」が土産だと思っていた。

だというのに奴が土産と称して連れてきたのは、背丈は成人と大差はないがおどおどした態度や困惑した表情を見せる、十代半ばの子供だ。なんだその子供はと視線だけで訴えれば、待つていたと言わんばかりにプロシユートが説明する。

『生まれつきのスタンド使い。能力はまだ完全に把握してはいねーが、オレが見た感じではかなり使いえそうな部類だ。オレの能力も見せて、説き伏せて連れてきた』

不意に「この後のコイツの生活を考えると、なんか不憫に思えちまって」と、ターゲットが猫を飼っていると必ず酒のボトルに詰めて持ち帰ってくる猫好きの仲間を思い出す。今回プロシユートが連れてきたのは、猫よりもずつと扱いが厄介な存在だが。

猫ならば「そうか」の一言ですませられる。そもそもあの男は構いすぎて嫌われるタイプで、連れてきた猫は一ヶ月もすれば逃げ出すものの、持ち前の人懐こさで他の人間に飼われていることが大半だ。

口もきけない猫は飼い主に何処から来たのか訊ねられても答える

ことはないし、犬と違って情や恩義にも厚くないから、寂しがってアジト周辺を彷徨くこともない。

だが、人となればそうもいかなくなる。生憎とチームのメンバーには記憶をどうこうできるスタンド使いはいない為、連れてきた以上は殺すか引き込むかのどちらかを選択するしか手段はない。

(さて、どうするか……)

リゾットは盗み見るようにしながら、少年を観察しだす。ふとした時に見せる目つきや表情を見る限り、家族に愛され幸せな生活を送っていたわけではないことは容易に想像できた。

だが、こんな掃き溜めにやってくるほど擦れている訳でもなさそうだ。やった悪事などせいぜい盗みや恫喝くらいで、人を殺すことはおろか大怪我させるような事すら、やったことはないのだろう。

つくづく、プロシユートに能力を見られてしまったのが憐れに思えた。元々子供には甘いという自覚はあるが(今回のような、身の丈に合わない不幸を背負わされた子供は特に)、何とかしてやれないかと考えてしまう。

(他のチームに回してやれないだろうか)

知られてしまった以上返すことはできないが、せめてもう少しマシンなチームに配属させてやれれば。

尤も、そんなことをすればプロシユートが激怒するのは火を見るよりあきらかだし、他のチームからも蔑まされている自分の口添えを聞いてくれる人間がいるとも思えないのだが。

「……おまえ」

「へ、へい！」

「オレたちのチームが、どんな仕事をしているのか聞いているか？」

「あ、その……人を殺す、暗殺者チームって聞いて……ます」

少年の言葉を聞いてリゾットは表情に出さなかったものの、驚いた。

てつきり、何も知らせずに騙すような形で連れてきたのだろうかと思っていたら、本人も承知してきてとは。

「殺したい奴でもいるのか？」

「い、いや！ そんな事はねえっす！」

「では何故、プロシユートについてきた。おまえの態度を見る限り、人を殺した経験はないだろう。殺したこともない、殺すつもりもない。どんな理由で、ここまでついてきた」

少年は下を向いて黙り込む。少しして、ぽつりぽつりと語りだす。

「ええとあの人……プロシユートの兄貴は、マフィアに目をつけられて殺されそうになっていたオレを助けてくれたんです。その、オレやこのチームの皆が持っているスタンド？ の力を使って」

「プロシユートに恩を感じて、一緒にきたのか」

「いや、確かにそれも少しはあるんですけど……オレがあの人に対して、最初に思った感情は『怖い』でした」

「だってあの人は、オレの方に価値があるからって、まるで電気のスイッチを押すかのような簡単さで引き金を引いて三人殺したんです。あんまりにも考え方が違いすぎるから、どうしようもなく怖かった」

「でも、同時に『強くて羨ましい』とも思っただけ。オレにはあんな真似、とうていできないから。そうしたらあの人と言ったんだ『変わりたいんだ』って、手を取れ。代償として地獄に落ちるだろうが、栄光と誇りを与えてやる』って」

「その言葉を聞いて、凄く安心できたんです。こんなに強い意志をもった人が、オレの前を歩いてくれる。オレが落ちる先でも、きつと待っていてくれるって！」

(……余計な心配だったようだな)

興奮したのかいつの間にか顔を上げ、必死に言い募る少年を見て、リゾットは苦笑した。

同時に思い出す。いとこの子供が飲酒運転の犠牲になった時、もう二度と表の世界を歩けなくなっても必ず復讐してやると誓ったのは、十四の時だったと。

まだ子供に見えたとしても自分で未来を考えて、選択することができるのなら。

(その意志を尊重してやるべきだろう)

「確か……ペッシンと言ったな」

「え？　へ、へい！　プロシユートの兄貴に、名付けてもらいやした！」

「プロシユートにどこまで聞いたかは知らんが、このチームはあまり待遇がよくない。嫌な仕事ばかり押し付けてくる割には入ってくる金は少ないし、他の連中は殺しを請け負っているということで見下したり蔑んでくる」

「……」

「だが、まあチームの空気は悪くないと思う。メンバーは少々癖のある連中ばかりだが、殺人狂というわけではない。おまえならきつと上手くやれるだろう」

「……」

「歓迎するぞ、ペッシ。この場所が、おまえにとって居心地のよいものになればいいのだかな」

ペッシ君とソルベ先輩にジエラート先輩

リゾットにチームへの仲間入りを許された次の日。ペッシは早速リゾットとプロシユートによって暗殺者チームのメンバーに紹介される。

大人数の見知らぬ相手の前に立たされた時はひどく緊張したが、昨日リゾットが言っていた通り好奇心、或いはからかいの視線や質問が投げられることはあったものの、嫌な顔はされずに一員として無事迎え入れてもらったのだが。

「さっきも言ったがペッシはプロシユートが連れてきた、スタンド能力はあるもののギャングではない、どちらかと言えば一般人寄りの人間だ。当然、殺しもまだやったことはない。だから一週間程度でいい。おまえたちの下につけてオレたちがどんな仕事をしているか見せてやりたい」

というリゾットの一言で、他のメンバーと共に行動することになった。

勿論、プロシユートから文句は出た。コイツを見つけて、連れてきたのはオレだ。オレがペッシを一人前にする、他のヤツの手はいらないと。

しかしリゾットの「ペッシを事後承諾で連れてきた事について、特に文句も言わずに受け入れたんだ。此方の条件も一つくらい飲んでもらおう」という言葉には反論ができなかったらしく、不服ながらも了承するしかなかったようだ。

それでも「いいか。どんなに相性が良いヤツが現れようとペッシを育てるのはオレで、オメーらには一時的に預けるだけだ。ソレを忘れるな」としつこいくらい釘を指してきたが。

こうしてペッシは一週間という短い期間だが、それぞれのメンバーと共に行動をすることになった。最初の一週間の相手はリゾット。いったいどんな仕事を言い渡されるのか。緊張していたが仕事らしい仕事はなく、付近のよく利用する店を紹介されたりアジト内にある備品の使い方や片付け方を説明される程度で、後はもっぱらアジトの

掃除をやっていたくらいだ。

一度他のメンバーのように殺しはしなくていいのかと訊ねてみたのだが、リゾットからの返答は「今メンバーは八人いて、人手が足りないということはない。無理に殺しをさせて、それに快感を覚えられて手がつけれなくなるのは困る。オレたちはあくまで“仕事”として殺しをしているだけで、殺人狂ではないからな」というものだった。その後「……したいのか？ それなら仕事を回すが」と変な気遣いをされたので、思いつきり首を振って断ったが。

そしてリゾット相手の一週間は何事もなく終わり、ソルベとジェラートと共に過ごす一週間が始まった。

* * *

「戻りましたー」

「ああ、お帰り。重かった？」

「いや、これぐらいならどうってことねえっす」

「しまう場所は解るか？」

「へい。この前リーダーに教えてもらったんで」

「じゃ、悪いけれどそのまま買い出し品の補充を頼む」

「解りやした」

ペッシがテーブルの上に紙袋を置き、買い出し品の分類を始めたのを見届けてから、ソルベとジェラートは手にしていた資料に目を落とす。本日の仕事は、書類整理に備品の補充だ。戦闘よりも偵察に向いているスタンドを操る二人は、暗殺対象の周囲を調べ上げて対象を始末するに相応しい場所や時間を、メンバーに伝える事を主としている。

ペッシがゴソゴソと動く音を聞きながらソルベとジェラートが作業を続けていると、補充が終わったのか辺りが静かになる。顔を上げると、此方をジッと窺うペッシと目があった。ジェラートはソルベに目配せしたあと苦笑いを浮かべる。何しろ自分たちは一人用のソファに二人で腰掛けているのだ。勿論、普通の座り方ではない。ソファにソルベが座り、抱えられるようにしてその膝の上に自分が座っているのだ。メンバーの一人に「デキてんだろ」と揶揄されるくらい

の格好なので、てつきりペッシもそんな事を考えながら見ているのだ
と思っていたのだが。

「寒いんですかい？ それなら、エアコンの温度を上げますけど」
かけられた言葉は、予想していたのものとは全然違うもの。

「……どうしてそう思うんだ」

ソルベが聞き返すと、ペッシは何故そんな質問をされるのか解らな
い、という顔をする。

「え、違うのかい？ 相棒と一緒にスリをしていた時は、寒いと二人み
たいによくくつついてたんだ。一日中外にいたからさ、冬はよくして
たなあ」

懐かしいなあと呟いた後、どこか切ない表情でペッシは下を向く。
どうも何かあったようだが、下手に慰めることはしないでおく。多分
ペッシも、優しい言葉をかけてもらいたいわけではないだろう。

「あー、なるほどな。けれどオレたちは寒いからくつついているわけ
じゃないぜ。特別仲がいいからこうしているのさ」

「ふーん」

「その証拠を見せてやるよ。ソルベ、足出して」

「いいのか？ ジェラート」

「ペッシなら、変に言いふらしたりしないだろ。ほら、オレたちこんな
ことをするくらい仲がいいのさ」

そう言ってソルベとジェラートは足を前に出すと、靴と靴下を脱い
で揃いの色のペディキュアをペッシに見せる。

「え、何ですかい？ コレ」

「ペディキュアって言うんだぜ。女が手の爪にマニキュア塗ってた
りするだろ？ それの足バージョン」

「へえ、でも何で足なの？」

「手だと目立つ。からかってくるのがあるからな、隠してやるには足
のほうがいい」

「そうなんだ」

身をかがめて、しげしげと眺め続けるペッシ。すると、何か良いこ
とを思いついたようにジェラートの口元が釣り上がる。

「ペッシ、せっかくだしやってやろうか」

「オ、オレはいいっすよお」

「遠慮するなつて。ソルベ、ペッシの事抑えておいて」

「悪いなペッシ、こういう時のジェラートは止めても聞かない。少しの間我慢してくれ」

「いや我慢て……あ、ちよつと、撥つてえ！」

慣れない触覚に身を振らせてみるものの、ジェラートの手は止まらず。数分後ペッシの爪先は、二人と同じ色に染まっていた。

「ほら、綺麗に塗れた。とりあえずオレたちという間は落としたりするなよ」

「数日の辛抱だ。こらえてくれ」

「うー、まあ別にいいんすけど……兄貴に見つかったら何か言われそう」

「ん？ ペッシ、プロシユートと同居しているのか？」

ソルベの質問に、ペッシはフルフルと首を振る。

「いや、流石に同居はしてないです。部屋狭いし。けれど、同じアップルタメントにいるから、寝るまでは兄貴の部屋にいるのが基本で。まだテレビとかねーし」

「シャワーは」

「兄貴の部屋のを借りてます。水道代が浮くだろうって」

「食事は」

「魚に塩降つて焼く程度ならオレも出来るんで。気が向くと兄貴も作ってくれますぜ」

思っていたより共にいる時間が長かった。

「………何で同居しないんだ」

「だーかーらっ部屋が狭いんですつてば！ 居るだけならともかく、オレの荷物まで置いたら寝る場所なくなっちゃう」

何気にオレの話きいてくれてないっすね、と呆れるペッシ。すると、彼の姿を上から下までまじまじと見ていたジェラートの口元が再び釣り上がる。

(ああ、コレはまた何かを企んでいるな)

その横顔を見て、ソルベは肩を竦めた。想像以上に世話を焼くプロシユートの話を聞いて、よからぬ事（本人にとっては楽しい事）を思いついたようだ。

「ペッシ、ついでだ。これから靴買いにいこう」

「え？ 何でそんな流れに？」

「いや、今ペディキュア塗って気がついたけれど、その靴かなりボロボロじゃん。服と比べると随分バランスが悪いなと思って」

「うーん……」

指摘されて、ペッシは足元に視線を向ける。

確かにここに来る前に服は新しく買い替えたが、靴はそのままだった。比較的汚れのない服に擦り切れて汚れたスニーカー。アンバランス極まりない。

「でも……」

「ペッシ、年上の人間がこう言っているのだから、好意に甘えておくものだ」

「ソルベ、ナイスアシスト！」

「えっと、じゃあお願いしやす。あ！ 安いのでいっすから！」

「そのつもり。あんまり良いやつ買おうと面倒くさそうだし」

「……？」

その後、ペディキュアはバレなかったものの新しい靴の存在は見事にプロシユートにバレ、数日後「明日からコレ着てアジトに来い」と服を投げつけられたとか。

しかもその服が靴まで一体化したオールインワンだと知ってジェラートは「靴も許されないとか。心狭すぎ」と腹を抱えて大笑いした。

ペッシ君とホルマジオ先輩

「なあ、ペッシ。頼みがある。おまえにしか出来ない仕事だ」
「オレしか……できない……?」

真摯な顔で此方を見つめてくるホルマジオの姿に、ペッシは怪訝な表情で言われた言葉を繰り返した。

緊張で喉が鳴る。ホルマジオと共に行動を初めて三日目。イカツイ姿に反して「しようがねーなあ」という魔法の言葉で世話を焼いてくれる彼に、プロシユートとはまた違う親しみを覚え初めていた矢先の事だった。

(一体何を頼まれるんだろう)

考えを巡らせてみても、ホルマジオが頼みたいという事がさっぱり思いつかない。自分よりもずっと先輩で、状況を的確に把握して判断を下せる彼が、言われた事をやるのが精一杯な自分の何を頼りにするというのか。

(ま、まさか……オレも遂に殺しを?)

「頼みたい事ってはなあ、ペッシ。おまえのそのビーチ・ボーイを使って」

「使つて……?」

「オレのテイラミスを探すのを手伝ってくれ」

* * *

「なあんだ。テイラミスって猫の名前だったんすね」

「ああ、十日前に殺したターゲットが飼ってた猫なんだけどよオ、ニヤンニヤン鳴いてたから外にあったボトルに詰めて持ち帰ってきたんだ。白黒の模様が綺麗な、美人顔だぜ」

「へー」

「餌を出せば喜んで食うし、椅子に座つてると膝に乗つて甘えてくる時もある。だつてのに、さつき少しばかり窓を開けてたら飛び出ていきやがつて。何が気に入らねエんだかなー」

「まあ、猫は気まぐれつすから」

相槌を打ちながらも、何となくだが逃げた原因は察していた。

ホルマジオはチーム内の誰もが認める猫好きだ。暗殺対象が猫を飼っていると、可哀想だと言つて連れて帰るくらいには。

しかし、可愛がり方の度が過ぎていっているというか。食事中や寝ているときに「可愛いなア、オメーは」と抱き上げたり力いっぱい撫で回すのはどうかと思うのだ。それで威嚇したり爪を立てたりする猫を見てイルーゾオが「おめーはよ、本当に猫が可愛いと思うなら、もうちょっと猫の気持ちも考えてやったらどうだ？ 誰だって飯食つてる時や眠つてる時に、邪魔をされたら腹が立つもんだぜ。猫が嫌がるのは当然つてもんだ」忠告するものの「んなコト言つたつてよー、可愛いんだからしようがねーよなあ〜」で聞き流している。そして、その度に猫に逃げられて「何が駄目だったんだ」と軽く落ち込む姿は、ある種の様式美のようにも見えると、他のメンバーは口を揃えて言う。「んで、そのテイラミスちゃんはどこに逃げ込んだんすか」

「この先を曲がった所までは見たんだけどよ。それから先は分かんねエんだよな。そう遠くには行つてないと思うが」

「了解。じゃあ後はビーチ・ボーイの糸を伸ばして探つてみますね」
「あー、そうだペッシン」

右手からビーチ・ボーイを呼び出し振り下ろそうとすると、手で制される。何か問題でもあったかのかとホルマジオを見れば。

「おまえさ、毎回無理して敬語使わなくてもいいぜ」
「え、でも」

「いーんだよ。他の所は知らねーが、ココはリーダーがその辺全く気にしてないからな。メローネとギアツチョを見てみるよ。おまえと大して変わらない歳だつてのにあの態度だぜ。ま、あそこまになつちまったら可愛げがなくなっちゃうが、オメーはもうちょっとアイツらを見習つてもいいな」

「うーん、じゃあそう、す、る」

「おう、その調子だ」

返答に満足したのか、ニカッと笑うホルマジオ。その笑顔につられるかのようにペッシンも笑つてから、猫が逃げ込んだと思われる方を見る。そして、竿をしつかりと握りしめたところ、もう一度ホルマジオ

から制しがかかった。

「今度はどうした、んだよ?」

「いや、ふと思ったんだけれどよ。そのビーチ・ボーイの糸は、攻撃受けたらどうなるのかと思ってさ」

「どうって……分かんねエよ、そんなこと」

「自分のスタンドだろ?」

「だってココに来るまで、オレの釣り竿見える人なんていなかったから」

「そういえばそうか。じゃあよ、今からちよつとオレに糸を使ってみろ。攻撃してみるからさ」

「ええ、なんでそうなるんだよ」

「いい機会じゃねエか。オレが良いっていつてるんだ。やってみてくれ」

「わ、分かった」

半ば強引に押し切られる形だったが、ペッシは頷いてビーチ・ボーイの糸をホルマジオの腕の中に潜り込ませる。すると、ホルマジオが背後から己のスタンド、リトル・フィートを出現させて人差し指で軽く糸を弾いてみた。途端。

「うおっ!?!」

「ホ、ホルマジオ!?!」

その衝撃はホルマジオの腕から全身に伝わったたのか、ビクリと身体が跳ね、同時に一回りほど彼の背が縮む。

「だ、大丈夫かい!?!」

「あー、心配すんな。そんなに力入れたわけじゃないからな。しかし、衝撃は釣っている人間じゃなくて釣られた側に返るのか。こりや、スゲー強みになるな」

「……そんなに凄いこと?」

「スタンドが攻撃された場合は、ダメージはそのスタンド使いも受けるのが基本だ。けどこの糸はおまえじゃなく、オレの方に行ったかな。初見殺しってヤツか? 相手は驚くと同時に手出しできない事を知って焦るだろうぜエ」

「ふーん」

「ま、その内おまえにも仕事が終わってくるだろうから、その時にまたやってみればいいさ。じゃ、お喋りもここまでにして後は頼むぜ」

「おうー」

今度こそ、とペッシはビーチ・ボーイの糸を、ホルマジオが示す場所目掛けて飛ばす。少しして掛かったのか、リールを巻き始めるものの「アレ？」と微妙な顔をしてホルマジオを見る。

「どうかしたか？」

「ホルマジオ、テイラミスちゃんつて長い尻尾なんだよな？ オレが引つ掛けた猫、なんか尻尾が短い感じなんだ。後、なんか体重が五キロより重い気がするし」

「ああ？ ちよつと待つてろ」

ホルマジオは妙な顔をしながらも、確認する為奥へと向かう。やがて「あー、コイツじゃねエわ。離していいぞ」という声が聞こえたので一度解除すると、鍵尻尾の白猫が丸々した体軀では考えられないほどの勢いで脇を走り抜けていった。どうやらさつき引つ掛けたのはこの猫だったらしい。

ホルマジオが戻ってきてから、再び糸を伸ばすと、また何かを引つ掛ける。今度は尻尾の長い猫みたいだと伝えれば、ホルマジオは走って確認に向かう。一瞬重みがなくなり「今回はテイラミスだ。解除してくれ」と言われたので指示の通りにすれば、どこから持ってきたのか猫を詰めたボトルを手にしたホルマジオが上機嫌で戻ってきた。怒っている猫を見る限り、この猫もそう遠くない内にホルマジオの元を逃げ出すのだろうと思うが、口には出さずに心の中に留めておく。

「グラッチェ、ペッシ。まったくそう怒んなよ、こうでもしねエーとまた逃げちまうだろ。しょうがねーな」

「見つかってよかったね。ホルマジオ」

「ああ、ペッシのお陰だぜ。けれどその糸、釣り上げた対象の体格も分かるのか。なるほど、プロシユートが入れ込むのも分かるぜ」

「いや、意識したのは今日が初めてなんだ。何時も使う相手は相棒だ

けだったし。でも……うん、スタンドって色んな使い方ができるんだな。なんか使うの、楽しくなってきたかも」

「その調子だぜ。さてと、手伝ってくれた後輩にはなんか奢ってやるとするか」

「ええ!?… 悪イよそんなの、大したことしてないぜ」

「そうは言うけどな。リーダーはおまえがメンバーに入るのを許可して、ソルベとジェラートは靴を買って、プロシユートはその服だろ？」

オレだけ何もなしってのはなー」

言いながら、何を買ってやろうかと思案する。ペツシが着ているオールインワンは今の時期は問題無いが、冬になれば肌寒そうな格好だ。

(だったら——)

「よおしつ、その格好じゃ寒い時もあるだろうから、上着にしようぜ」

こうして、そのままホルマジオと共に服屋に連れられたペツシは色々と試着した結果、一着のコートを買い与えられることになった。

そしてその後、またしてもプロシユートに「こつちを着ろ」と別のコートを渡されたとか。

ペッシ君とイルーゾ先輩

弱ったという表情で、ペッシは自分の隣に立つ男を見上げた。黒い髪を六つの束にして結んだ男、イルーゾオに助けを求めるように。

だが、イルーゾオの表情もあまり冴えない。何時ものようにどこか人を見下したような態度は影を潜め、組んでいる腕も無駄に力が入っているのか、握りしめている服にも皺が深く刻まれている。

「どうするんだい、イルーゾオ」

「どうするつつたつてよオ。コイツは予想外だぜ」

舌打ちをしてから、イルーゾオは鏡の中から外の世界を睨みつけ、叫ぶ。

「何だつてオレの許可も得ずに、鏡を撤去しているんだッ！」と。

* * *

ギャング『パッショーネ』の暗殺者チームに入って一ヶ月。遂にペッシにも暗殺の仕事が舞い込んできた。正確には今ペッシが共に行動しているイルーゾオに対してであつて、ペッシはあくまで手伝い程度の事しかできないが。

ターゲットはアメリカからやってきたギャングの一味。此方の縄張りにまで麻薬の売買を始めたのがボスに知られることになり、暗殺の命令が下されることとなったのだ。

ソルベとジェラートから渡された資料に載っているのは、麻薬を取り仕切る幹部の一人。やり方は問わないが見せしめの意味も含めて、出来るだけ酷い殺し方をしろと書かれていたらしい。

資料を眺めながら、どんな状況で殺すのが効果的かイルーゾオは想像を巡らせる。この幹部は狙われている事を承知しているのか、常に複数人の護衛を付けて行動しているらしい。情報に隅から隅まで目を通し、三日後に行われるという会合で殺すこととした。

その会合には他の幹部やチームのリーダー等結構な数の人数が集まるのだとか。当然護衛等の準備も整っているだろうが、鏡さえあればそんなもの無いに等しい状態だ。完全な警護の元、突然一人の幹部が消え死体となって現れる。例のギャングの連中に見せしめと恐怖

を植え付けるには十分な演出だと思えた。

だから昨日、会合で使われる部屋に数個の鏡を設置したのだが。別のギャングが会合を盗聴するという噂が奴らの耳に入ったらしい。結果部屋は入念に調べられ、数個の盗聴器と共に「置いた覚えがない」と鏡が全て撤去されてしまったのだ。

* * *

「あー、クソツ。こりゃ計画の練り直しか。これ以上ないってくらいのシチュエーションだったのによ」

頭をガリガリと搔きながら、イルーゾオはぼやく。こうなると会合が終わって、部屋から出た所を鏡の世界に引きずり込むのが妥当か。

しかし、確実にそう上手くいってくれるかと問われれば微妙なところだ。イルーゾオのスタンド『マン・イン・ザ・ミラー』を使う場合、まず相手が鏡を見て、自分たちを認識する必要がある。此方から好きに相手を選んで、引きずり込めるわけではない。

そして、認識させられる人数だが『マン・イン・ザ・ミラー』が一度に引きずり込めるのは一人。つまり、一人だけだ。認識した相手の中から選ぶということも出来ない。更に言えば、認識させたい対象も此方から指定することも出来ないので、複数人が一斉に鏡を見た場合は最初に見た人間が認識することになる。タイミングと運が合わないと、ターゲットに行き着くまでに何人も殺すハメになりそう。別に何人殺そうと文句は言われはしないが、殺した人数が増えたからといって貰える金が増えるわけでもないし、非常に手間がかかる。

だが、見せしめの効果を考慮すると今のタイミングが一番いいだろう。面倒だが仕方ない。イルーゾオは隣に立っているペッシに声をかけて、場所を移動すると口を開きかけた時。

「イルーゾオ」

先に机に視線を向けていたペッシが口を開く。

「何だよ。てかおめー、先輩によくそんな口きけるなア」

「え。だ。だってホルマジオが普通に話していいって」

「ったくあの野郎。余計なアドバイスしやがって。……で、何だっつんだ？」

「この部屋の灰皿。どうしてこれだけ形が違うんだい？ 値段も高そうだし」

指さしたのはガラスの灰皿だ。指摘された通り数個置かれている灰皿の中で、一つだけ輝きが違う物がある。

「ああ、ソレはターゲットが使う灰皿だ。オレには理解できないが、奴には吸う葉巻とライター、灰皿に相当なこだわりがあるらしくてな。それ以外は手も触れないらしい」

だから、この部屋に設置した鏡は全て灰皿の位置を想定して置いていた。今となつては、無駄な努力に終わってしまったが。

「てことは、この灰皿はターゲット以外使わないってことだよな？」

「まあな。で、それが？」

「あのさ、ぶつつけ本番なんだけれど」

此処は鏡の世界なので他に人はいないのだが、イマイチよく理解していないのかペッシは背伸びをするとイルーゾオの耳元である提案をする。話半分という表情で聞いていたイルーゾオだったが途中で表情を変えると。

「悪くねエ作戦だ。やってみる価値はあるだろう。よしペッシ、オレが許可してやる。おまえのスタンドを出して、灰皿に針を引っ掛けてみる」

* * *

会合も終わりに近づき、男は短く息を吐き緊張を緩める。とある情報筋から自分が狙われていると言う話を聞いていたが、どうやら杞憂だったようだ。もつともこの人数の中、襲ってくる確率は少ないだろうが、とんでもない無鉄砲や馬鹿がギャングの世界には存在する。実際、会合前に部屋を調べさせたら盗聴器や理由は解らないが数点の鏡が出てきたのだ。

だが、結局何も起こらなかった。男は胸元から葉巻を取り出すと火を付け、深く吸い込む。灰が落ちる前にと手前にある灰皿を引き寄せようとした時だった。一瞬だが、指先から『何か』が入り込むような違和感を覚える。だが、疑問を思うことは無かった。その前に身体がグンツと引っぱられ、勢いのまま扉を体当たりするようにして開ける

と、廊下をずるずると引きずられたからだ。

「おい、どうした!？」

「一体どこに!？」

部下や他の幹部たちの叫びが聞こえるが、自分の方が知りたいくらいだ。とつさに廊下の角に指を引っ掛けて堪えようとするものの、身体を引っ張る力の方が強くて、外れてしまう。

「な、何が……!？」

混乱したまま男は、前を見る。すると、壁にかけられている姿見に、必死な顔で此方を見ている緑の髪 of 醜男と人を見下したような笑みを浮かべる黒い髪の男がいた。

それを見て、男は遂に自分の頭がおかしくなったのかと思った。二人が背後にいるというのならまだ解る。だが、彼らは自分の前に立っていた。鏡の中だというのに「男がいる」という表現がふさわしいのだ。段々と姿見に近づくにつれて、黒い髪の男の声が聞こえる。

「いいぞ、ペッシィ！ おめーの予想通りビーチ・ボーイの針が食い込んだみたいだッ！ この勢いのままヤツをコツチに連れてこい！」

「そしててめー！ オレの姿が見えたらてめーはもうお終いだッ！

マン・イン・ザ・ミラー、ヤツを許可しろ。そしてこのまま、喉を掻っ切るんだッ！」

* * *

「ペッシィ、おめー最後の最後で何ブルってやがる！ このオレに手間かけさせやがってよオッ！」

「ピッ、ゴ、ゴメンよイルーゾオ」

頭上から浴びせられる怒声に、ペッシィは大きく肩を震わせて目を閉じた。

此処は鏡の世界。ターゲットは目論見通りこちら側に引きずり込まれ、喉と口を大きく切り裂かれて事切れていた。だが、上手くいったわけではない。直前でイルーゾオが手にしていたマチエツトに怯えたペッシィが、ビーチ・ボーイを解除してしまったのだ。急いで肩を掴み引きずり込んだものの、ターゲットは最後の力を振り絞って逃走。ビル内で、激しい追いかけっこをするはめになった。

「とはいえ、まあ今回はおまえが灰皿を餌にして、ヤツを釣り上げる作戦のおかげで楽ができた。その点については感謝してるぜ」

「それなら良かったけど、ソイツ……どうするんだい？」

「見せしめだからな、このビル内のどこか付近にでも棄てりやあいだろ。デカイ鏡があればいいが。いつそのこと、小さい鏡からでも大丈夫のようにバラバラにでもするか」

「ヒエエエエエ」

ペッシは身体をブルリと震わせると、固く目を閉じて背を向ける。もう動かない死体にすら怯える様に、イルーゾオは本当に暗殺者になれるのかと呆れた表情をするものの、愚痴をこぼす事はしなかった。(サポートする側としては優秀だったしな)

とりあえずこの状態なら殺しはできなくとも、サポーターとしてチームにいて問題はないだろう。プロシユートの目に狂いはなかったということか。

(そういえばコイツの面倒見たヤツらは、全員何か買ってやってたんだな。余計な事と思うが、オレだけ何もしないでホルマジオ辺りからかわれるのも癪だし今回の件もある。金がねエがどうするか……あ)

「ペッシ。コイツを棄てたら買い物に行くぞ。リストバンドを買ってやる」

「リストバンド？」

「確かリストバンドは汗止めと額の汗の拭うようらしいが、手首の保護の効果もあったはずだ。おまえは釣り竿使うんだから、着けておいても悪くねえだろ」

「ありがとう、イルーゾオ！」

「ああ(ペッシのヤツ、貰い慣れてやがるな。甘やかしすぎなんじゃあねエのか?) じゃ、チャツチャと終わらせるか」

集中すべくイルーゾオは死体へ向き直る。そして、右膝目掛けてマチェットを振り下ろした。

ペッシ君とメローネ君

雑居ビルの二階にあるカフェテリアの窓際の席で、注文したミルクを啜りながらペッシは外を眺めていた。時折下を通る人間を見つけると、隣で熱心にラップトップを弄っている相方のメローネに合図を送る。そんな事を何度も繰り返していると。

「いたぞペッシ、アイツが今回のターゲットだ」

メローネが身を乗り出しながら、ある一点を指差した。同じ方向に視線を向けると、奥の道から帽子を深く被った男性らしき人が早足で歩いてくる。

「さつきも言ったが欲しいのは血液だ。上手くやってくれよ」

「分かった。針を直接引つ掛けて怪我させていいかい？」

「いや、できる事なら気付かれないようやってくれ。相手もスタンド使いらしくて、どういう能力かは知らないがその力を使って今まで逃げ回っているんだとか。オレのベイビィ・フェイスから逃れられるとは思えないが、用心にこしたことはない」

「それなら……アレを使うのは？」

周囲を一瞥してから、ペッシが男の進む先に転がっている割れたガラス瓶を示した。それを見て彼の意図を理解したメローネは「よし、それでいこう。じゃあオレは先に外に出ているから頼むぜ」と伝票を手にとると席を立つ。会計を済ませ外に出ると、ちょうど男が腕を押しさえて立ち上がろうとしているところだった。チラリと下を見ると、石畳の一つからビーチ・ボーイの針が僅かに覗いている。足先に針を引つ掛けて転ばせたのか。一瞬ならば、石畳の段差に足を引つ掛けたと勘違いするだろう。

男が押さえている箇所からはポタポタと血が溢れて、石畳を赤く染めていた。あまりに事が上手く運んだ事に、ニヤつきそうになる口元を必死に押さえ込みながら、メローネは声をかえる。

「大丈夫ですか？ 怪我をしているようですが」

「あ、ああ。足を引つ掛けてしまったんだが、転んだ先にガラス瓶があったんだ。たいしたことはない」

「ですが、血が凄い。人を呼びましようか」

「いや、気にしないでくれ。出血は多いが傷は深くないから、見た目ほどひどくはないんだ。動けないわけではないし、何だったらこのまま医者に向かうから、そこまでしてもらわなくても大丈夫だ。氣遣ってくれてありがとう。それじゃあ」

男は早口で捲し立てると、ふらつきながらその場を後にした。あの様子ならば今の怪我をただの偶然ととらえているようだ。

「……お大事に」

去っていく後ろ姿を眺めながら呟くと、メローネはガラス棒を取り出しながらしゃがみこんで血液を掬い取り、小瓶の中に数滴垂らす。小瓶の蓋を締めていると、カフエテリアから出てきたペッシシがメローネの姿を見つければ駆け寄ってきた。

「メローネ、どうだった？」

「ベネ、血液は十分に採取できた。ターゲットも怪我を、ただの不注意による事故だと気にも止めてなさそうだし、後は母体だけだが……ちようど良さそうな女がいた」

前を横切る一人の女の姿を目にした途端、舌なめずりするメローネにペッシシは引き攣った笑顔を浮かべるが「ほぼ任務は完了だ。ペッシシ、オレは彼女と少し会話をしてくるから、先にアジトに戻っていてもいいぜ」と言われるとハツとした表情でメローネを呼ぶ。

「ん、どうした？」

「メローネはこの後用事はあるかい？ なかつたらオレ、訊きたいことがあるんだけど」

「それは人に聞かれると不味い話か？」

「今回の仕事とは関係ない話だぜ」

「なら、そのベンチに座って待っていてくれ。何、直ぐに終わらせて戻ってくるからさ」

* * *

「で、ペッシシ。訊きたい事ってなんだ？」

ベンチに腰掛けて十分程。ぼんやりと青い空を眺めていると、ベンチの背もたれの方からメローネが覆いかぶさるようになり、視界を

遮ってきた。長い髪が頬に当たって擦りたい。脇にメローネのスタンド、ベイビー・フェイスと連絡を取れるパソコンを抱えている様子からして、仕込みは上手くいったのだろう。

「うん、メローネおすすめの本屋があったら教えてほしいんだ」

「それは構わないが、何だってまた」

「オレシア、ビーチ・ボーイを身体に潜らせると、大体だけれどどの部分に針があるのか解るんだ」

「ああ、ホルマジオがそう言って手放して褒めていたもんな」

「だけどき、あくまで『この辺だな』くらいだからよお、人体に詳しい本でも買って勉強しようかと思って」

ペッシの言葉に、メローネは瞬きをした。次の瞬間、満面の笑みで正面に回ると「ペッシ」と彼の身体を力いっぱい抱きしめる。

「おわっメローネ!」

「ペッシ、偉いぞ〜! 学習する気があるというのは素晴らしいことだ! オレはペッシのその気持ちを応援する、手伝うから何でも言うてくれ」

「あ、ありがとってメローネ、ここ外! 見られてる!!」

「どうせ仲のいい友達同士がふざけて抱き合ってるぐらいにしか思われないさ。ところでペッシ、君はどんな本が欲しいんだ?」

突然、真面目な顔になって訪ねてくるメローネに呆気にとられながらも、ペッシは考えていた事を口にする。

「オレ、そんなに本に詳しくないから上手く説明できるか解らないけど、メローネがベイビーの教育によく絵本使ってるだろ? あんな感じのイラストが沢山入った、解りやすい本がいいんだけど」

「となるとカラーの専門書辺りがいいのか。数冊候補は浮かぶが、ペッシの好みとなると……。よし、せっかくだ。下見に行くぞ」

* * *

メローネに連れられ、ペッシは図書館に来ていた。馴れた様子で館内を歩く彼の背を追いかけていると、ある棚の前で立ち止まる。その棚からスイスイと数冊の大判の抜き取ると「この辺が、ペッシの言っていた条件に合う本だぜ」と渡された。

「うわ、結構種類があるモンだなあ」

「全体的な内容としてはどれも似た感じなんだが、力を入れている箇所がそれぞれの出版社で違うんだ。だから一通り目を通してみて、自分の知りたい情報にピントがあっている本を選べばいい」

「おうっ！」

そのまま案内されて、奥にある座席へと腰を下ろすとペッシはページを捲り始める。

指で文字をなぞりながら夢中で読み出す姿を見てからメローネも隣の椅子に腰掛けると、ラップトップを開いてカフェテリアからの作業を再開した。そして、時折ベイビィ・フェイスのパソコンから反応があると席を立ち、どこからともなく本を持ってきて説明をする。

「メローネはこの図書館に詳しいみたいだけれど、よく利用しているのかい？」

「ああ、常連というほどではないが、最低でも月に一回は使わせてもらっているな。だから、どんな本がどの棚にあるかは大体理解しているし、新しい本が入荷されれば読んでベイビィの教育に使えそうなら本屋で購入させてもらってる。ところでペッシ、読んで好みの本はあったかい？」

「うん、とりあえずこれとこの二冊が解りやすく書いてあるからいいかなって。けど結構高くて。オレなんかじゃ手がでねえよ」

困ったような表情を浮かべながら、ペッシは裏表紙をメローネに見せた。カラーページがあることと、専門書なだけあってなかなかいい値段になっている。すると、メローネは呆けた顔をした後、口を開く。「何言ってるんだペッシ。そんなのオレが出してやるから気にする必要無いぜ」

「何でえ!？」

自分で払うつもりでいたペッシは、つい大きな声を出す。慌てて口を塞ぐが奥まった場所にいたお陰で、非難の目を向けられることはなかった。

「何でって、ペッシと組んだメンバー全員が何か買ってやっているだろ？ だったらここはオレが払うのが当然だ」

「いや、でも悪イよ」

「ん？ イルーツオには悪びれもせずねだつたんだろ？」

指摘されて「う」と一瞬言葉に詰まる。

「アレはホルマジオから、あんまり下手にでると調子にのって馬鹿にされるからって言われてたから。買ってくれたのもそんなに高いモンじゃなかったし」

「ペッシ、オレは確かに皆が買っているからというのもあるが、それだけで買うわけじゃない。言っただろ。『学習する気があるのは素晴らしいことだ』って。ペッシがそうやってチームの役に立てるように頑張るから、その気持ちを応援するために買うんだ。そうじゃなきゃ、さっきのカフェテリアで奢った事で済まずさ」

「う、うん」

「とはいえ二冊を正規の値段で買うのは、流石にオレも財布的に厳しい。今回の仕事の金も、まだ入ってないしな。だからとりあえずは古本屋を回ってみよう。ひよっとしたら安く買えるかもしれない。ペッシもそれでいいか？」

「ああ！ オレもその方が気が楽だよ。本は読めればいいんだし」

「ベネ、それじゃあ早速行ってみよう。確かここから一番近い古本屋は——」

その日、個性的な髪型と服装の二人組があちこちの本屋に出現したと少し話題になったのかなんとか。

ペッシ君とギアッチョ君

「ここで大丈夫だ、ギアッチョ。降りしてくれ」

「ああ、分かった」

路肩に車を寄せて止めれば、助手席からチームの仲間、メローネが降りる。

「迎えはいいんだな？」

「ああ、ギアッチョは昨日まで仕事でようやく今日が休みになったんだろ？ 帰りは一人で帰ってくるさ。じゃあ、楽しい休みを」

メローネはヒラヒラと手を振りながら車から離れると、すぐ近くの街路樹に身体を預けて通行人の観察を始める。ヤツ曰く、他人の癖や仕草を注視することによって健康状態や血液型、調子がよければ星座や年齢すら判断する事ができるのだとか。なので自分の人間観察は趣味と実益を兼ねている、というのは本人がよく口にしている。関わりそうもない、赤の他人の事なんかどうでもいいと思うが、メローネがソレを楽しんでいるのならオレが口に挟むことはないだろう。実際、ベイビィ・フェイスを誕生させるには母体となる女の星座や血液型は、ターゲットとの相性を調べるのに重要だ。素直に言う女の方が少ないのだから、経験を元にある程度の推測を立てて行動した方が仕事は捗るのかもしれない。

木に寄りかかっていたメローネが目の前を通った女を呼び止めるのを見届けてから、オレはゆっくりと車を動かした。どこかに出かけようかと思うのだが、行きたい場所が浮かばない。そんなことをしている内に、手は勝手にハンドルを動かしていて気がつけばアジトのすぐ近くまでやってきていた。この無意識の行動は仕事で染み付いたクセなのか、オレがアジトを気に入っている証拠なのか。どちらか判断が付けられずに複雑な表情をしていると、視界の隅に緑色の動くものが入る。もしやと思って顔を向けると、予想通り動く緑色は最近オレたちのチームに入った新入り、ペッシだった。デカイクーラーボックスを担いでいる所を見ると……コレから釣りってところか？

ゆつくりと、ハンドルを回してペッシの後ろに車をつける。オレができるだけ音を立てずに移動させたのもあるが、尾行されているのに気づかないってどういうことだ。狙われる可能性のある仕事に就いているのだから、もう少し周囲に気を向けるよ。

クラクションを鳴らせば、大げさに肩を揺らした後にソロソロと振り向くが、相手がオレだと分かると「ギアツチョコかく」と胸をなでおろす。

「びつくりさせないでくれよオ。オレ、てつきり退けつて意味で鳴らされたかと思つたじゃねーか」

「んなもんでイチイチビビつてんなよ。オレらは気分次第で簡単に人を殺せる能力があるんだぜ」

「まだ殺しをしたことのないオレに何言つてんだよ。だいたい一般人殺したつて面倒くさいだけじゃん。金にもならねーんだし」
「まーな」

想像していた以上の正論を返されて、思わず納得してしまう。

「で、ペッシ。クーラーボックス持つて出掛けるつてことはこれから釣りか？」

「おう。今日兄貴はホルマジオと出掛けて一日帰つてこないし、オレは休みもらつたからビーチ・ボーイの練習がらて海に行こうかと思つて。ギアツチョコも……休みだよな？」

「オイオイ、ペッシ。今オメーはオレと組んでんだぞ。テメーが休みなら相棒のオレだつて休みなのは当たり前だろ。それとも何か、オレは休み無しで身を粉にして働けつてか？　ところでよオ、身を粉にしてつて」

「イヤイヤ、別にそういう意味で言つたんじゃないよ。ただ、ギアツチョコはオレよりも色々できるからさア。やる事が多いんじゃないかと思つて」

不意に思つた疑問を口にする前に、ペッシに遮られた。蒸し返してもいいのだが、それをすると話が一向に進まなくなるのでグツと堪えて、話を続ける。

「なるほどな。それでオメーは、これから海に向かう真つ最中つて訳

だ。歩いてか？」

「うん。オレ、ギアツチヨみてーに自由に出来る車持つてねーし。そんな離れた距離じゃねエから、このまま向かうつもりだけれど」
「だったら連れて行ってやるぜ、どうする？」

「え、いいのかい!? じゃあ頼むよ、へへッラツキー」

儲けたと嬉しそうな声で、ペッシは助手席に乗り込んだ。生憎とこの車は後部座席がない作るので、クーラーボックスは胸元に抱える形になるが。

「何処に停めればいいんだ」

「別に決まった釣り場なんてなんかから、ギアツチヨが車止めやすい所でもいいぜ。車停めてくれた場所の、あんまり人目に付きにくい所で釣るよ」

「じゃあ、あそこだな。距離はそんなねーけれど、一応シートベルトしておけよ」

シートベルトに手をかけるのを横目で確認してから、アクセルを踏んで運転を再開する。数分もすれば、海岸が見えてきた。拓けた場所に車を停めれば、ペッシは礼を言いながら車から降りる。

「ありがとう。ところで、ギアツチヨはこれからどうするんだい？」

「それなんだけれどよ、何にも予定も計画もねーんだよ。オメーの釣りでも見てていいか？」

「オレは問題ないけれど……退屈じゃないかい？ 何だったら近くの店で釣竿でも買うなり借りるなりしてこようか」

「したこともねーし、これからする気もないのに金かけるなんて勿体無いねエ。ダツシユボードにメローネが本突っ込んでたから、それ読みながら見てることにする」

「うん、分かった。飽きたら帰っても全線構わないから」

「おう」

ペッシが歩いていく方角を確認してから、ダツシユボードに手をかける。開ければやはり、数冊の本が入っている。メローネはベイビー・フェイスの教育の為か、蘊蓄や雑学の本をよく読む。押し込められていた本もその類だった。

手にとってパラパラと捲ること数回。オレ好みの本を見つけたのでソレを手にして、ペツシが居るであろう方へ歩いていく。奥まった場所でシートを敷き、ビーチ・ボーイの糸を海面に垂らしているペツシの姿を見つけた。

「あ、ギアツチョコこつち。ちよつと狭いけれど、シートに座つて。暑さ対策にスポーツドリンク凍らせたペットボトルとタオル持ってきたから、好きに使つていいぜ」

「至れり尽くせりで悪くないんだがよ、何でオマエそんなカツコしてるんだ？」

釣りをしているペツシは、タオルを被せるようにして被っていた。帽子を被らないのかという疑問に「だつてよオ」と理由を述べる。

「帽子被ると髪がペシヤンと潰れて『ハゲ』みたいに見えるんだよ。かと言って穴開けて髪出すのはなんか帽子の使い方としてどうかも思うし、変な風に目立ちそうだし」

「だな」
帽子のてっぺんから立たせた髪の毛を出した男を見つけた場合を想像してみる。間違いなくオレは二度見し「何だアレ、どうなってるんだ」と自問自答しているだろう。

「あ。そうだギアツチョコ。なんか釣る魚のリクエストとかある？ 流石にマグロとかは無理だけれど、普通の魚ならいけると思うぜ」

「あー、そうだな……じゃあトビウオ」
「解った」

頷いてからペツシは右の掌からビーチ・ボーイを出現させると、沖めがけて糸を飛ばす。その後、クラーボックスからビニールで包んだ魚の凶鑑のようなモノを取り出して眺め出した。

「ソレ、メローネが買つて渡したヤツか？」

車でアイツを送っている最中、勉強熱心なペツシに本を買つてやつたとペツシの勤勉さを褒めているのか、金を出した自分を褒めているのかよく解らない話を散々聞かされていたので、今見ているのがそんなのかと訊ねるとペツシは首を振つて答える。

「コレは自分で買ったんだよ。趣味みたいなモンになるし。あ、そう

だ。昼飯用にパニーニ作って持ってきたんだけどギアツチョも食う？」

「もうっ」

それからは隣に並んだり背中越しに寄りかかったりと、体制を変えながら過ごす。多少日差しは強いが、茹だるような暑さまではいかないから、比較的過ごしやすいと言えるだろう。悪くない時間の潰し方だと思いつながらページを捲っていると「ギアツチョ」と名前を呼ばれた。

「どうした」

「オレ、ちゃんと人を殺せるようになるかな」

顔を向ければ、どこか不安げな横顔が見える。

「他のチームの連中はさ、オレたちのチームが殺しをしてるから見下したり嫌ったりするけど、皆優しいし、構ってくれるからオレは好きだよ。死ぬんなら、皆と同じ地獄の底に行きたいくらいに。だから」「そうだなあ……」

確かにコイツはビビりで、今の状態じゃ誰かと一緒じゃなきゃ仕事ができなせない。

だが、スタンドの能力としては暗殺に十分向いているし、殺しや大怪我させるのはまだ動揺するものの、ターゲットに向けて糸を放つて軽い怪我を負わせることや、釣り上げることに關しては、躊躇することなくやりとげているから。

「今すぐつてのは無理かもしれないけど、時間を掛ければイケんじやねえか。努力はしているし何より、オメー自体にやる気はあるんだからよ」

「本当かい!?!」

「ま、肝心の時期は分かんねーけどな」

その時、ビーチ・ボーイに反応が出た。二人揃って海の方へと視線を走らせる。

「今度は何だ、イカか？ タコか？」

「いや、魚だ。あ、これ胸ビレっぽいな。ひよつとしたら……」

リールを思いつき巻き上げると、水面から大きな胸ビレを持った

トビウオが姿を表した。

「ギアツチヨ！ リクエストのトビウオ釣れたぜ!!」

「やるじゃねーかペツシ！ ところでトビウオってどうやって料理するんだ」

「さあ……？ あ、そうだ聞いてくれよオギアツチヨ。最近兄貴がさ、テレビとかで映ってた料理とか見るとオレに『食いてエ。オメーが作れ』って言うんだ。オレが出来るわけねーのに」

「はあ？ プロシユートのヤツ、ことある度に『オメーはいい暗殺者になれるんだから、そんな事してんな』って怒鳴ってんじゃねーか。言ってることとやってることが矛盾してるってどういうことだア？」

お互いに文句を言ったあと、笑い合う。まだ、日は高い位置にある。もう少し、此処でのんびりしてもいいだろう。

四月一日深夜、自室にて

ソリッド・ナージ。

ボスがかつて使っていたという偽名の男を探しているという女が噂になる時、組織の空気が僅かに変わった。

いったいどういう関係だったのか。会って何をするつもりなのか。一人娘がいるらしいが、その娘はボスの血縁者なのか。

片隅で語られる噂話だが、熱が籠もった会話とは裏腹に、噂が事実かどうか確認してやろうと言いだす者は皆無だった。

当然と言えば当然か。ボスの周辺を探すということは死を意味する。

今まで面白半分でボスの正体を探ろうとし、生まれてきた事を後悔するような拷問の果てに殺されたのは、何もソルベとジェラートだけではない。何人、何チームもそんな目に合ったという話は組織内に随分と広まっている為、馬鹿でもない限り危ない橋を渡ろうとする奴はいないだろう。だいたい麻薬を扱う連中は、そんなことをしなくても薬の値段を上げるだけで、欲しい金額が懐に入ってくる。幹部の連中も、充分立場の恩恵を受けている。ヒソヒソと話だけをして、しばらくすれば噂自体されなくなるだろう。そう考えていたが。

「ソリッド・ナージというボスの偽名の男を探している女の住所が分かった。……行くか？」

噂から数日後、数枚の紙を手にリゾットが訊ねてきた。

その紙は何だとイルーゾオが問えば「ソルベとジェラートが遺したボスの情報だ」との答えが返ってきたので、オレは思わず笑ってしまった。

なるほど。ソルベとジェラートは何かあった時の為に、リゾットの奴にだけ自分たちが集めた情報の隠し場所、或いは情報そのものを教えていたのか。リゾットもリゾットだ。「二人のことは忘れろ」と言っていないながら自分が一番気にかけていたんじゃねーか、と。

身内には非情になりきれない、甘い奴だ。

「これは、ソルベとジェラートがよこしたチャンスだと思っている。

ソリッド・ナージの娘は父親であるボスの正体を知っている可能性があるし、例え知らなくても此方が抑えておけばボスの情報を手がかりを掴めるかもしれない」

「オレたちを蔑ろにしたボスから地位と金を奪い取り、見下していた他の連中に実力を見せつけてやる。勿論、危険が無いとは言えない。娘を守る為、正体を知られないようにする為刺客を放ってくるだろう事は容易に考えられる。おそらくはスタンド使い、親衛隊の連中だ。腕や脚の一本や二本、使い物にならなくなる可能性はあるだろう」

「だがオレはこのメンバーなら、必ずボスを引きずり降ろす事ができると確信している。これは己惚れや驕りではなく、お前たちと共に思った率直な意見だ。強制はしない。全くの無傷で成し遂げられるモノではないだろうからな。しかし、オレはやる。お前たちは……どうする?」

リゾットの言葉に全員が息を飲み込んだあと、首を降って傍に付く。奴がオレたちを信じているのと同様に、オレたちだって奴を、他のメンバーの能力の強さを信じているのだ。

その後準備が整い次第、オレたちはボスの娘を確保すべくドナテラという女の家へ向かったが、室内に娘はいなかった。ボスが何かを感じ取り、幹部の誰かに娘の保護を命令したのだろう。せっかくのチャンスを不意にしたのは惜しかったが、それでも根気よく家探しをすれば多少の情報を得ることは出来た。向こうも向こうでオレたちが予想以上に早く嗅ぎつけてきたから、痕跡を全て消すことはできなかったのだろう。

手に入れた情報とネアポリスについて素早く行動出来そうな幹部を照らし合わせた結果、娘を保護したのはペリーコロかポルポのどちらかだろうという結論になった。とはいえペリーコロはスタンド使いではなかった筈だし、ポルポの野郎は刑務所暮らしだ。どちらも娘の護衛は難しい。更に突き詰めて、ポルポのお気に入り部下の一人で、スタンド使いであるブチャラティが率いるチームに任されているんじゃないかという話が出た。確定ではないが確率としては高いほうだろう。

夜が明け次第、偵察も兼ねてホルマジオがブチャラテイチームの連中に接触することになった。不安はない。ホルマジオのスタンド能力なら、誰にも気づかれないことなくヤツらの隠れ家に侵入し、娘を連れ去る事ができるだろう。

はたして娘は、父親であるボスの情報を持っているだろうか。母親が死ぬ間際に探そうとしていたくらいだ。オレたち同様、何も知らないかもしれない。

だが、それは承知の上だ。捕らえれば利用方法なんざいくらでも出てくるだろう。

何だったらボスを追跡する際に、メローネのスタンドの餌食にでもしてしまえばいい。血縁者同士、案外と使えるかもしれない。可哀想だと思わないわけではないが、オレたちがのし上がる為の尊い犠牲というやつだ。

「……ペッシン」

ふと、弟分の顔が浮かぶ。チームに引き込んで二年、殺しは未だ成し遂げていないが能力と実力は既に一人前と考えていいだろう。

おそらく、この戦いでアイツは人を殺す。マンモーニから卒業できるし、大仕事での殺しならば自信もついてビビることもなくなる、いいこと尽くめだ。

「そういえば、ペッシンを初めて見つけた時は、面倒見る気なんて一切なかったな」

懐かしい思い出か。アイツが薄汚れた仲間をビーチ・ボーイで釣り上げる様を初めて見た時、ポルポの試験を受けずともスタンドを使える人間がいるのかと驚き、興奮した。

でも、それだけだ。ペッシンの能力も『人間を釣り上げるだけ』のモノで、面白くて便利そうだが暗殺に使えるとは想像もしていなかったし、リゾットに連絡も入れた時も『スタンド使いのガキを見つけたから、捕まえて組織の人間に渡せば、それなりの金になるんじゃないか』もいう程度の気持ちだった。考えが覆ったのは、ペッシンが仲間だった男の片腕を見た時。

『殺してやるって言ったんだ!!』

叫んだ瞬間にビーチ・ボーイの針を男の体内に潜り込ませ、容赦なく壁に打ち付ける姿にコイツのスタンド能力は人を釣り上げるのではなく、人を殺すためのモノなのだと理解した。

分かればとにかく欲しくなった。こんな能力をスリの手伝いだけに使うのは惜しい、もつと色々な場面で力を奮うべきだと。

その後銃弾に怯み、すっかり怖気づいた様子にこの甘ったれがと舌打ちしたくもなったが、逆に何も知らないコイツに一から教えてやれると思えば、苛つきも直ぐに育てる楽しみに変化した。

明日、オレたちは人生一番の大勝負に出る。ペッシの成長がチームが栄光を掴むことに繋がると考えれば。

「楽しみだな、ペッシ」

オレの大切な弟分。輝かしい未来を、どうかオレたちに見せてくれ。

18時10分過ぎ　ファイレンツエ超特急にて

何かを思う間もなく、ビーチ・ボーイの糸がオレの首に巻き付いた。そのままゴリユ、という鈍い音とともに、視界がありえない方に向く。見えない方向から「ヒツ」という高めの悲鳴が上がる。

「グハッ」

口内に血の味が広がり、収まりきらない血が口や鼻から零れ出た。口を開けば大量の血が足元に散らばる。

痛い、苦しい、息が出来ない。

上の三つが占めてよく働かない頭のまま、何とか首を動かして、霞む視界のまま前を見た。妙な角度になっているのは、首が上手く動かないからだ。折れたのだということは、血を吐いた瞬間から理解していた。

「オレは、死ぬのか？」

目の前にいるブチャラテイたちに問う為に、疑問を口にしたのではない。映画の超人でもあるまいし、首が折れたら人は死ぬのが当たり前だ。

死ぬ事そのものに恐れはない。直ぐにかたをつけてくると思っていたホルマジオとイルーゾオが死んだ時から、死の可能性はチラチラとよぎっていた。プロシユートの兄貴だつてグチャグチャの状態で、なんとか息をしている有様だ。兄貴が力尽きるか、オレが窒素してくたばるか、順番なんてそう変わらないだろう。

死そのものよりも、死んだ後の事を考える方が、どうしようもなく怖かった。

だつて兄貴たちと違ってオレは、まだ二人しか殺していない！これじゃあ死んだところで、兄貴と同じ地獄の底に行けるとは思えなかった。兄貴のような性格に憧れて、死後も同じ所に行けますようにと願つてついできたのだ。一緒にいられないなんて、絶対に嫌だ。

どうしよう。どうすればオレは、死んでも兄貴の傍にいられる。

必死で考えていたら、胸元でモゾモゾと動く感触があった。それで思い出す。列車を止めようとしていた時、運転室にいたアレを持って

きていたことに。

ああ、そうだ。コイツだ。コイツを使えば、後四人殺せる。

オレが胸元から運転室にいた亀を取り出して見せつけてやれば、ブチャラティとミスタのスタンドが目を見開いた。持ってきていると思わなかったのだろうか。随分とおめでたい奴らだ。

亀の中からボスの娘を出してから、ブチャラティに告げる。

娘は返してやる。連れて逃げればいい。だけど、他の仲間はオレの道連れだ。守ると意気込んでいた仲間を失って、絶望を味わえと。

これでオレが殺した人間は、六人になる。多いか少ないかは解らない。だが、今の放っておいても死ぬような状態じゃ、あと四人も殺すことが出来れば充分だと思う。それにコイツらは、正義の味方というヤツだ。ただ電車に乗っている一般人をより、追われている娘を守ろうとするのコイツらを殺せば、オレの罪はもっと重くなるだろう。

オレの言葉を黙って聞いていたブチャラティが、目に静かな怒りを湛えて口を開く。

「さつき、お前の目の中にダイヤモンドのように硬い決意を持つ気高さを見たが……。落ちたな、ただのゲス野郎に」

ヤツの言葉に、思わず笑いたくなくなった。ゲス野郎？ 何を今更。オレたちのチームが何をやっていたか知らないわけじゃないくせに。

オレたちは金を貰えば人々の暮らしを良くしようと努力する政治家や、まだ十にも満たない金持ちの妻や本妻の子供を躊躇いなく始末する殺し屋だ。そんなことを繰り返して、他の連中がオレたちのチームをなんて言っていたか。

『暗殺者チームってのはドンづまりのチームだ。報酬も少ない上にボスからの信頼もない。期待されてない連中が追いやられる場所さ』

『あんなチームに配属されるくらいなら、死んだ方がマシだ』

どうせお前やお前たちのチームの連中も、そんなことを思ったり口に出していたんだろう。

オレの関して何か言っているのは、チームの皆と兄貴だけだ。お前に言われても虫唾が走る。

声に出せない苛つきをぶつけるように、身体ごと傾かせて持ってい

た亀を尖った石のある地面へ突き出した。皆落ちてしまえばいい。オレも、亀の連中の命も、ブチャラテイの希望も！

最後に、ブチャラテイがどんな表情でオレを見ているのか気になつて、視線を向けた。てつきり悔しそうな、或いは絶望に満ちた顔をしているかと思つたのに。

「何をやつたつてしくじるもんなのさ。ゲス野郎はな」

ブチャラテイはジツパーで伸ばした腕を投げつけるようにして、オレの顔を殴りつけた。力任せに殴りつけた衝撃で、掌から亀がこぼれ落ち、反対にオレの身体は飛ぶように浮き上がる。そして落ちる途中、ろくな抵抗もできないまま、奴の渾身のラツシュを全身にくらつた。

「アリーヴエデルチ」

別れの言葉と同時に、殴られた箇所につけられたジツパーによつて、オレの四肢はバラバラになる。見えたのは甲羅に傷一つない亀と、列車の車輪から転げ落ちた兄貴の背中。ジワリと涙が浮かぶ。

「兄……貴……」

ゴメンよ。仇を取れなくて。せつかく兄貴が命を張つてまで、オレが勝てるようにサポートしてくれたのに。

最後に思つたのは後悔だった。その後オレの身体は川に落ち、水の冷たさに晒されながら意識が途切れた。

時刻不明、クル・ヌ・ギ・アにて

不思議な場所を、ただ一人で歩いてきた。何も無い、原っぱのような土が向き出しな所で、空には太陽も雲もないというのに、周りの様子が伺える程度には明かるい。

「どこだよ、ココ……」

そう口にするものの、何となくだがこの場所が何処かは解っていた。だってオレはついさつき、ブチャラテイのスタンドよって体をバラバラにされた上に川へと落とされたのだ。なのに、何一つ欠けることのない状態でこの得体のしれない場所に立っている。俗に言う『死後の世界』というヤツなんだろう。

「兄貴……」

辺りを見回すものの、やはり近くには人の影や気配はない。ビーチ・ボーイを出せば詮索の範囲はもつと広がったのかもしれないが、此処に来て以来願えばいつも右腕に収まってくれていたオレの相棒は、全く姿を見せてくれなかった。ビーチ・ボーイは出てくれない。兄貴の姿も見つけられない。

「オレ、オレ、どうしたら……」

遂に不安が頂点に達し、目を瞑ってしゃがみこむ。兄貴の死が確実な物だと理解した時、オレは独り立ちする覚悟をして、実際できると思っていた。それはブチャラテイ達を殺して、更にボスやボスを守る奴を殺していけば、自分が死んだ時に自動的に兄貴と同じ地獄の底へと行けると希望が持てたからだ。目標があれば、兄貴がいなくても歩いていった。

けれど、今は駄目だ。兄貴が傍にいてくれない。進む先に兄貴はいないかもしれない。そう考えるだけで足は進むことを拒み、心は恐怖と不安で占められる。

いつの間に、オレはこんなに弱くなってしまうんだろう。親が死んで親戚の誰もオレを引き取ってくれないとわかった時は、誰にも頼らずとも生きてやると息巻いていたくらいなのに。兄貴の後ろを歩けないかと思うだけで、動くことが出来なくなるなんて。

このまま動かずにいたらどうなるのだろうか、とふと考えた。一度死んだけれど、もう一度死んだりするのだろうか。それとも、石や塵になってこの世界の景色の一部になったりするのだろうか。

しゃがみこんだまま、そんな問答を繰り返す。キツイ体勢を長い時間とっているけれど、痛みや疲れはやってこないし腹だつて減る気配はない。それをいい事にずっと顔を埋めたまましゃがみこんでいると、上から声が降ってきた。

「オイ、ペッシ。いつまで経ってもこねーと思つたら、オメーこんな所にいたのか」

ずっと聞きたかつた声が聞こえて、顔を上げる前にコートの際を掴まれて持ち上げられる。どこか呆れているような顔は、オレがずっと会いたかつた人で、嬉しい余り都合のいい幻覚を見ているんじゃないかと錯覚するくらいだった。

「……兄貴?」

「ペッシ。オレがオメーの兄貴以外に見えるつてののか?」

「本当に? 夢じゃねえんだよな」

「何だつてそこまでして、オレの存在を否定したがる」

「だつてオレ、二人しか殺してない。ブチャラティと、奴らの仲間だつてやり損ねちまつたし。そんな状態で、兄貴と同じ場所に来れるなんて思つてもいなかつたんだよ」

「そうだな。オメーの殺した人数なら、同じ地獄でももう少しマシンな所に行けたかもな。けれど、神様つてヤツはお気に召さなかつたんだろう」

オメーがやろうとしたゲスな行為が

ニンマリと笑つて告げる言葉を理解するのに、数秒かかった。そうか、オレがやろうとした悪あがきは、ちゃんと実を結んでくれたのか。

「……つ、兄貴い。オレ、嬉しいよー!」

「つたく、地獄の最下層にいるつてのに泣いて喜びやがつて。最低の人間になれたのが、そんなにいいか。ペッシ」

「当たり前じゃ、ねーか。だつて兄貴と同じ側の人間になれたんだ。死んでも一緒に歩けるんだ」

それと同時に『ああ、コレで正真正銘の人でなしになったんだな』とほんの少しだけ胸が痛む。

だってオレは天国に入るであろう、十六年間絶えず愛情を注いで幸せを願ってくれたであろう両親と会えなくなることを悲しむ事よりも、三年にも満たない上にこんな地獄の底に引きずり下ろした相手との再会を、心の底から喜んでいいるのだから。

「兄貴。リーダー達、やってくれますかね」

「オメーがブチャラテイの野郎に怪我させたのは見ていたから、メローネに連絡を入れておいた。アイツならオレ達の死を無駄にはしねえだろ」

「そつすね。……このまま進めば、ホルマジオたちにも会えるかな」

「此処が地獄の最下層なら会えるだろ。アイツらがオレらより上にいるハズはねえしな」

他愛ない会話をしながら歩いていると、ある事に気がつく。兄貴がオレと並んで歩いているのだ。兄貴はオレより背が高い分脚も長い。だから、歩く時はいつもオレが小走りで後ろをついていたのに。

疑問に思って訊ねてみたら、返ってきた答えは。

「オメーはもうマンモーニじゃなくなっただけだから。運が味方してくれなかつたからこんなザマになっちまったが、一人前になったんだ。だったら、隣を歩くのが当然だろう？　なあ、ペツシ」

ああ、今日は死ぬのが一番いい日だ。

ペッシ「旅行から帰ってきたら、ボスが変わってたんすけど」

それは、年が明けて十日程経った日の事だった。

「帰ったぜ」

「リーダー、戻ってきました」

「全く、ちよつと一度に頼み過ぎじゃないか？ 三人で行ったからいいものの、二人じゃ持ちきれない量だぜ」

買い出しを頼んでいたギアツチヨ、ペッシ、メローネが、両手に荷物を抱えながらアジトに戻ってきた。「ご苦労だったな」とリゾットは声を掛けようと振り向き、目を細める。

メローネとギアツチヨがそれぞれ、一パックのティッシュボックスを持っていたのだ。それは今回の買い出しには頼んでいないもので、なぜ彼らが持っているのか。

勿論、買ってきて悪いという訳ではない。ティッシュボックスは頻繁に使うものだし、腐るものでもないから使用期限を気にする必要もないのだが、まだ予備はいくつかあったはずだ。

特売で買ってきたとしても、それなら買出しに出ていた誰かが、携帯電話で購入の是非を訊ねる電話を入れてくるだろう。それとも単純な気紛れで買ってきたのか。そんな事を考えながらメローネたちを眺めていたら、荷物を抱えたままペッシが自分の前にやってきた。そして「あの、リーダー。コレを」と、コートのポケットからチケットの様な物を差し出す。

「ペッシー！」

一体何だと質問する前に、ギアツチヨが大声でペッシの名を呼ぶ。荷物をテーブルの上に置くと、急いで傍に駆け寄り首の辺りを右腕で閉めるようにしながら引き寄せる。

「だから、何で出しちまうんだよ！ 黙ってたらバレないって言ったじゃあねーか！」

「で、でもよお、ギアツチヨとメローネのティッシュボックスを訊かれ

て『ならペッシは?』って言われたらオレ、上手くごまかせる自信がないし」

「ほら、だから言っただろ。オレが持っていれば完璧に隠し通して見せるって。それなのに」

「オメーの服の何処に物を仕舞えるスペースがあるってんだよ。かと言つてオレが持つても誤魔化し切れるとは限らなかつたけれどな、クソツッ!」

「ゴメンよ、ギアツチョー」

突然目の前で騒ぎ出した三人に、リゾットは瞬きを繰り返す。相変わらず状況の把握はできていない。だが、騒ぎの原因がペッシの持っているチケットだという事は理解できた。結局コレは何なのか、手を伸ばして確認する。

「何だ……宝くじ、か?」

ペッシが渡そうとしてきたのは、連番になっている宝くじだった。きっかり十枚。とはいえ、相変わらずティッシュボックスとの関係性は見いだせないが。

「あー、お前ら。商店会で福引き引いてきたのか」

その時、共に騒動を眺めていたホルマジオが、思い当たる節があるらしく叫んだ。

「福引き?」

「ペッシたちが買出しに行った商店会で、昨日から福引きやってんだよ。五万リラで一回だったか?」

「ああ、残念ながらオレとギアツチョはハズレのティッシュボックスだったがな。ペッシは見事に宝くじのチケットを引き当てたのさ」

「オレは通りにあるリストランテの食事券が良かったなあ」

「ワインセットも悪くなかつたけどな」

そんなやり取りを見てから、リゾットは受け取った宝くじに目をやる。しばらく眺めていたが「ペッシ」と名前を呼ぶと。

「コレはお前のモノだ。お前が持っているといい」

ツィ、と。チケットを返してやる。

「え? コレ、チームの生活費から出てるモノでオレの金じゃないで

すし」

「オレが福引きを引いても必ず同じ物が引けるとは限らないからな。メローネの言う通り、ペッシが引き当てたのだから、持つ権利はペッシにあるだろう」

「でも……うー」

躊躇する様子を見せたものの、リゾットが引つ込める気がないので察したのでろう。

「そうッスね。どうせ当たっても一番下の金額だろうから、遠慮なくいただきます」

軽く頭を下げながら宝くじを受け取ると、先程のコートのポケットにしまい込む。

「なあペッシ。もし、その宝くじで大当たりが出たら、オレたち三人で昼飯食べにいかないか？」

「いいけどさ、メローネ。絶対に一番下の賞だつて」

「いや、ひよつとしたら末尾二桁くらいはいくかもしれないぜ」

「もー、ギアツチヨまでー」

困り顔を作りながらも、ペッシはどこか嬉しそうだった。その後、渡した宝くじの事などすっかり頭から抜け落ちていたのだが、二月になったある日のこと。

「イルーゾオ、ちよつとその新聞貸してくれないか？」

「ああ、見終わったからいいぜ。許可する」

この日は、皆予定がなかったらしい。特に約束をしたわけでもなかったのだが、気がつけばアジトに全員が集まっている状態になっていた。スポーツ番組を付けて鼻肩のチームを応援したり、デスクボードに置いてある酒を飲んだりと各自好きな事をして過ごしていた。そんな中メローネは新聞を受け取ると、ある頁を開いた状態でプロシユートと共にソファアで寛いでいるペッシの傍へとやってくる。

「ほらペッシ。答え合わせの時間だぜ」

「へ？」

差し出された新聞に、ペッシはわけが分からない、とメローネを見つめた。だが「ほら、ココ」と示された箇所を見て合点がいったらし

い。

「よく覚えてたなあ。オレ、すっかり忘れてたよ」

立ち上がり、それぞれの私物入れになっている棚から何かを取り出すと、持ってきた物と新聞のある部分を交互に眺め始めたので、隣に腰掛けていたプロシユートが早速訊ねてきた。

「ペッシ。オメー何見てんだ」

「ああ、コレっすか。この前福引きでもらった、宝くじの当選番号の確認ですぜ」

「そこそこの金額が当たったら、今日のランチは通りの先にあるピッツェリアにするって、約束したのさ」

「そうか……。オイ、ペッシ。昼食いに行くってんなら、オレも行くぞ」

「プロシユートもかあ?」

「オレとペッシの分は出す。それで文句ねーだろ。ギアツチヨ」

「相変わらずペッシには優しいことで」

からかう口調のメローネを、プロシユートはギロリと睨みつけるが効果はないようだ。そんなやり取りの中、ペッシは律儀に番号の確認をしていたが突然ピタリと動きが止まった。「え?」と呟き、再度確認をすると。

「嘘お!」

新聞紙をシワが出来るくらい強く握りしめながら叫ぶ。直ぐに反応を返したのはメローネとギアツチヨだ。

「当たったのかペッシ、でかした!」

「で、いくらなんだあ!?!」

「二……億……」

「ん?」

「一等、二億五千万リラ当たったよ!」

ほぼ悲鳴に近い叫びと同時に、辺りが静まり返る。何人かが息を飲む音だけが響く中、歓声を上げたのはやはりメローネとギアツチヨだった。

「やるじゃないか! 二億五千万リラあれば、たいていの事はできる

ぞ！」

「ああ！ メンバー全員で三ツ星レストランで暴食してもまだ有り余るくらいだ！」

覆いかぶさるようにして二人はペッシに抱きつき、それを皮切りに他のメンバーも話しかけてくる。

「ペッシ。オレは前、オメーにそのリストバンドを買ってやったよな。それだけの金が入ったのなら、オレの為に何か買っても全然問題ないんじゃないか？」

「イルーゾオ、二年も前の話蒸し返してんなよ。あー、でも折角だ。アジトを引越すってのはどうだ？ どうせならペット持ち込み可の物件だよ」

「それよりも車だ！ ペッシ、車を買え！」

「お前たち、あまりペッシにたかるんじゃない」

リゾットが嗜めるがメンバーの言葉に思うことがあったのか、ジツと考え込むペッシ。少しして「それだったら」と口を開く。

「オレ、皆と一緒に旅行に行きたい」

「旅行？」

「うん。ここに来て二年経ったけれど、リーダー達全員と泊りがけの旅行とか、行ったことがないからさ。纏まった金が入ったんだし、皆と出掛けて嫌なこと忘れて思いっきり楽しみたいなあ」

どうっすかね？

その言葉に再び黙り込む一同。今度最初に動き出したのはプロシユートだった。

「よく言ったペッシ！ 流石はオレの弟分だ！」

「兄貴、痛い！ 熱い!!」

煙が出るんじゃないかと不安になるくらい、ペッシを激しく撫で回すプロシユート。撫でる度に妙な音がするが、お構いなしだ。

「……旅行か。悪くないな」

「思い返してみれば、このチームに来てから旅行なんて行ってないな。リーダーはどうだ？」

「オレも覚えはない」

「どうせなら、仕事も忘れられそうなくらい遠い所がいいぜ」

「とは言え、まずは出資者の意見を聞かないとだろ。ペツシ、お前旅行に行くのなら何処に行きたいんだ？」

「えっと、なら海が綺麗な島とかいいなあって……だから兄貴、痛いですってばあー！」

「ペツシペツシペツシペツシよおー！」

「海だな、解った。ペツシはそのままプロシユートとよろしくやって、後はオレたちに任せてくれないか！」

* * *

その後、ペツシの意見を元にメンバーの希望を合わせた結果、モルディブとドバイの二ヶ国に行くのはどうだという話になった。ペツシに相談すれば「いいね」の了承がもらえたので、行く先は無事に決まる。

更に話を進めメンバーの行きたい所、やりたい事等を考慮しながら日程やプランを決めていく。だいたいの予定が決まった所で旅行会社へ相談に行き、ホテルや飛行機のチケットの手配を頼む。その間にやってくる殺しの仕事は手早く片付け、旅行当日。

なんの憂いもなく暗殺者チームの七人は、巨大なキャリアバッグを転がしながら空港内を歩いていった。

「それにしても、まさか安月給の身で長期旅行に行ける日が来るとは思いもしなかったぜ。なあ、イルーゾオ」

「ああ、何しろ十日の日程だからな。ペツシ様々だぜ。ところでオメー、旅先でも猫拾ってくるなよ」

「そういえばリーダー、ポルポに連絡はしたのか？」

「ああ、ついさっきな。奴が気づく頃にはオレたちは飛行機の中だろうが、連絡は入れたんだ。後は知らん。他にもスタンド使いはいるんだ、仕事はソイツらに頼めばいい」

「そうこなくてはな、リゾット！」

「楽しみですな、兄貴」

「当たり前だ。行くって決めたからにはとことん楽しむぞ、ペツシ」
「おう！」

何時ものようにプロシユートの少し後ろについていたペツシだったが、その時前に、同じようなキャリーバッグを携えてしきりに辺りを見回しながら歩く旅行者を見つける。

アジア系の顔つきで、どこの国の人間かまでは判断出来ない。しかし、自分よりも低い背丈にどことなく親近感を覚えたペツシは、言葉が通じるか気になりつつも声をかけた。

「アンタ、さつきからキョロキョロしているけれど、どうしたんだい」
「あ……ネアポリス市街地方面の出口に行きたいんですけれど……合ってますか？」

「ああ、こっちの方向であつてるぜ。随分イタリア語が上手いな、中国人？」

「ボクは日本人ですよ。言葉はその……人に教えてもらつて」

「フーン。ま、いい旅になるといいな」

「こつちこそありがとうございます。良い旅を！」

軽く挨拶を交わし、ペツシは旅行者と別れる。

今日は奇しくも三月二十九日。広瀬康一が空条承太郎に頼まれ、イタリア・ネアポリスにやってきた日であつた。